QURUWA 戦略に基づくかわまちづくりエリア方針
～おとがわエリアビジョン～

2018年3月 策定
2019年3月 改訂
2023年3月 改訂

おとがわエリアビジョンワーキンググループ

目次

1．おとがわエリアビジョンとは
→おとがわエリアビジョンとは 04
→策定の目的（背景、課題、目的） 05
→更新のポイント 06
→QURUWA戦略上の位置づけ 07
→検討の流れ（ワークショップ・個別ヒアリング） 09

2．乙川エリアの基本情報
→QURUWA戦略とは 14
→QURUWA地区内にある主要拠点 15
→乙川エリアの特徴（立地特性・歴史・生き物） 16
→かわまちづくりにおけるこれまでの歩み 19

3．乙川エリアの将来像（目指す姿）
→乙川エリアの将来像（目指す姿） 21
→自然と都市が交わる暮らしとは 22
→ゾーニングとイメージ 28
→推進体制と利活用スキーム 35

4．乙川エリアで行われるプロジェクト
①主要拠点プロジェクト
→太陽の城跡地 38
→殿橋テラス 38
→桜城橋橋上広場・橋詰広場 38
→北東街区（オトリバーサイドテラス） 38
→東岡崎駅整備事業 38

②行政主導プロジェクト
→QURUWA戦略の推進（まちづくり推進課） 39
→QURUWAの情報発信（まちづくり推進課） 40
→かわまちづくり支援（まちづくり推進課） 41
→指定管理業務の監督（公園緑地課） 43
→QURUWAイベントの企画（公園緑地課） 44
→景観まちづくりの推進（まちづくりデザイン課） 45
→交通の社会実験の実施（企画課、デジタル推進課） 46
→各種イベント（桜まつり、花火大会等）の実施（観光推進課、商工労政課） 47

③民間活用プロジェクト
→ソウルフードジャム（リバーライフ推進委員会） 50
→アウトバックガレージマーケット（リバーライフ推進委員会） 52
→フィールドディスカバリーゲーム（リバーライフ推進委員会） 54
→川びらき・川あそび・川ぐらし（ONE RIVER） 56
→Let it Camp（ONE RIVER） 58
→おとがわリバークリーン（ONE RIVER） 60
→岡崎城下舟あそび（ツツイ・エンターテイメント） 62
→乙川SUP体験（waileo SUP school＆tours） 64
→スポーツバイク・マウンテンバイク体験会（サイクルぴっとイノウエ） 66
→おとがわサンデーヨガ（STUDIO ALMA） 68
→オカザキリバーサイドマラソン（ORM実行委員会） 70
→乙川ナイトマーケット（乙川ナイトマーケット実行委員会） 72
→犬市場（犬市場実行委員会） 74
→HANDMADE SELECT MARKET（ハセマ実行委員会） 76
→オトマルシェ（mono and） 78
→ジュニアランニングスクール（トライアスロンスクールST） 80
→新鮮野菜の朝市（おかざき農遊会） 82
→おとがわ星空観望会・月待会（岡崎星とあそぶ会） 84
→桜城橋ふき・殿橋洗い（あいち橋の会） 86

5．おとがわエリアビジョンの実現に向けて
→［提案①］（仮称）おとがわエリアプラットフォームの設立 89
→［提案②］公共空間の世話役の役割整理と位置づけ 91
→［提案③］エリアビジョンの広報・プロモーションの推進 92

第１章

おとがわエリアビジョンとは

おとがわエリアビジョンとは

おとがわエリアビジョンは、乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画（QURUWA戦略）
における乙川エリアについて、乙川の将来の活用イメージを定義し、
エリアの目指す姿やプロジェクト、マネジメント体制等を示すものである。

おとがわエリアビジョンの位置づけ

① 公民で共有するエリアビジョンを地域・民間が中心となり策定する。

- 地先オーナー、拠点事業者、民間プレイヤー、地域住民等からの意見をもとに策定する。
- 乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画（QURUWA戦略）に基づいた計画として位置づける。

② 短期・中期・長期でそれぞれの段階での目指す姿を描き、最終形にいたるまでのプロセスを共有する。

- 一気に最終形を目指して進めるのではなく、短期・中期・長期と段階的に進める。

③ エリアビジョンは事業主体・事業内容の変更等更新を前提とする。

- 策定したエリアビジョンを正確に実現することを目指すのではなく、社会状況の変化や検証の結果、利害関係者の変更、他の事業との調整等によって、随時更新出来るような柔軟なものとする。原則５年に１回は更新する
- 実現性の高い取組みよりスタートし、社会実験や事業公募等による検証の過程を組み、数年単位で実施内容の深化を行いながら段階的に進める。
- 詳細の仕様・条件は別途設定する。

エリアビジョン策定の背景

課題①：社会実験やハード整備が先行していたことから、それらの目標となるべき乙川エリア全体の将来イメージやそれを実現する手段等を整理する必要がある。

課題②：各事業の方向性やプレイヤーの活動は個別の動きになっており連動していないため、乙川エリアならではの暮らし方、過ごし方の創出をする必要がある。

課題③：公民共有の将来イメージを示すことにより、質の良い民間投資を誘発する必要がある。

策定の目的

乙川エリアの将来の活用イメージを定義し、以下３点を目的に策定する。

① 地域・民間・行政でエリアの将来像と短期・中期・長期で展開するプロジェクトや活用イメージを共有する。

② みんなで目指す姿を共有し、同じ方向を向いて、地域は暮らしに、民間は事業に、行政は計画・施策に反映していく。

③ 目指す姿を明確にすることで良質な民間事業者を呼び込む。

更新のポイント

コンセプト：生活者も含めた「私の川」になるようなビジョンへ

更新ポイント①：エリアビジョン構成の整理

エリアビジョン全体の構成を整理した（11章→5章）

おとがわエリアビジョン（更新前：2018年策定）の構成

目的	1.おとがわエリアビジョンの位置付け		
基本情報	2．乙川エリアの基本情報	3．おとがわエリアにおける RF計画策定以降の取組み	4．乙川エリアの立地特性
目指す姿	5．将来実現したいシーン		
	6．乙川エリアの定義・将来像（エリアビジョン）と役割		
実現手段	7．ゾーニングとイメージ	8．おとがわエリアで実現する プロジェクト	9．推進体制と 利活用スキーム
スケジュール	10．事業推進スケジュール		
	11．次年度事業推進イメージ		

おとがわエリアビジョン（更新後：2023年策定）の構成

目的	1．おとがわエリアビジョンとは
基本情報	2．乙川エリアの基本情報
目指す姿	3．乙川エリアの将来像（目指す姿） ゾーニングとイメージ、推進体制と利活用スキーム
実現手段	4．乙川エリアで行われるプロジェクト 主要拠点プロジェクト・行政主導プロジェクト・民間活用プロジェクト
提案	5．おとがわエリアビジョンの実現に向けて

更新ポイント②：乙川エリアの基本情報（２章）の更新

より地域住民の視点を取り入れるため、川を広くとらえた上で基本情報の更新を行った。

更新ポイント③：乙川エリアの将来像（３章）の具体化

乙川エリアの将来像を具体化するために、５つのレイヤー（自然・環境、風景、特別な日の乙川、いつもの乙川、コミュニティ、周辺エリアとのつながり）に分けて整理を行い、ワークショップ等で出された意見を参考に、キャッチコピーとビジョン実現のための具体アクションを抽出した。

更新ポイント④：個別プロジェクト（４章）の情報更新

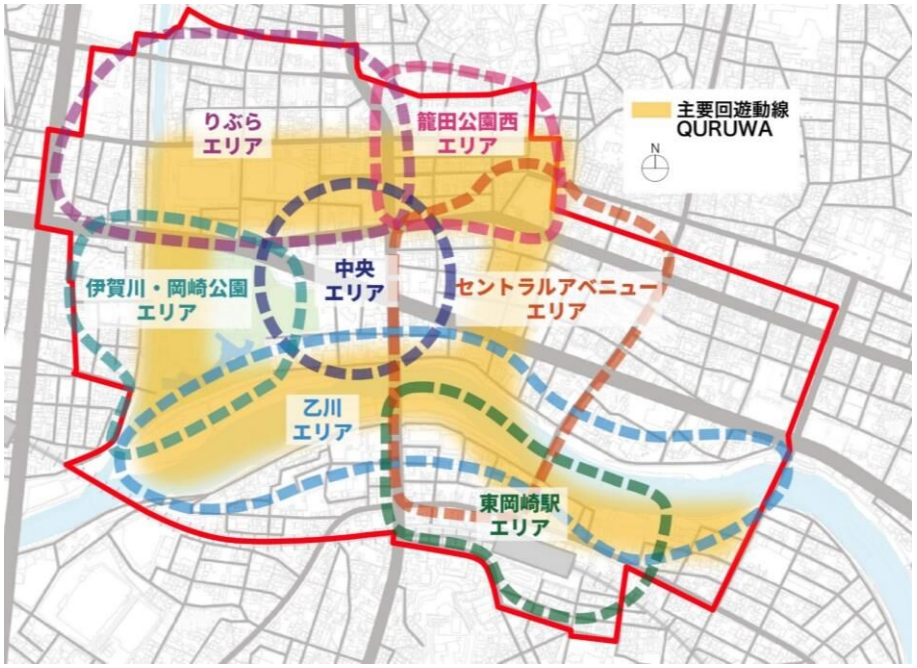
現状に合わせるため個別ヒアリングを実施し、情報の更新及びプロジェクトの追加等を行った。
また行政が実施するプロジェクトも新たに掲載した。

更新ポイント⑤：エリアビジョン実現に向けて具体的な方策（提案）を掲載

次回更新までに実現することを想定した、エリアビジョン実現に向けた具体的な方策を追加した。

QURUWA戦略の中の「おとがわエリアビジョン」の位置づけ

- 乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画（QURUWA戦略）とは、QURUWA地区内の豊富な公共空間を活用して、パブリックマインドを持つ民間を引き込む公民連携プロジェクト（QURUWAプロジェクト）を実施することにより、その回遊を実現させ、波及効果として、まちの活性化（暮らしの質の向上・エリアの価値向上）を図る戦略。
- 乙川エリアはQURUWA地区内にある名鉄鉄橋から吹矢橋までの河川区域及び沿川の範囲をさす。
- QURUWA戦略上の乙川エリアの将来像の詳細内容を「おとがわエリアビジョン」に記載している。



エリアの定義・将来像（ビジョン）

主要回遊動線QURUWA沿線のエリアを歴史性、自然環境、土地利用、人口動態、市民ワークショップの結果等をもとに7つに分け、各エリアの定義・将来像を整理した。

QURUWA地区全体の定義･将来像		
これからの100年を暮らすまち ー新しい住み方･働き方･遊び方を楽しむー ・歩いて楽しく、自転車で回れて、車でも来やすいまち ・個性的な７つのエリアの特徴を磨き上げることで、めぐる楽しさが一層向上したエリア ・エリアをめぐる充実した交通機能（自転車・バス・歩行動線の連携） ・子ども連れでも安心して快適に過ごせるような歩行者優先のエリア ・車での分かりやすいアクセスルートと集約再配置された駐車場		
エリア	定義	将来像
りぶら	まち暮らしの玄関口	・公共交通と駐車場が整理された交通結節点 ・玄関口としての優れた景観 ・子育て世代が安心して暮らせる環境 ・りぶらから街へ人の流れを生むコンテンツの集積と歩行者優先の環境
籠田公園西	岡崎ならではとなる人とコンテンツが集まる繁華街	・旧東海道などにおける優れた景観と歩行者優先の環境、積極的に活用される通り ・岡崎ならではとなる人とコンテンツの集積 ・道路活用のための規制緩和に誘発された沿道の民間投資が活発化
セントラルアベニュー	豊かな公共の庭としてのセントラルアベニューを中心とした、安全で快適な暮らしの空間	・日常生活を支える充実した環境 ・子育て世代の居住人口が増加 ・安全で快適な歩行環境 ・豊かな暮らしを支えるコンテンツの集積 ・街のシンボルとしてのオープンスペースと持続可能な運営管理の実現
乙川	自然と都市が交わる暮らし	・乙川及び沿川の優れた景観と視点場からの良好な眺望 ・水辺及び水上の活用によるアクティビティの充実 ・水辺の過ごし方･暮らし方の開発と定着 ・水辺と一体となった建築物と景観 ・沿川の民間主体による河川空間の積極的活用と管理運営の実現
伊賀川･岡崎公園	岡崎の歴史的価値を伝える物語の舞台	・歴史的な価値の保全と優れた景観 ・観光客に対するサービスの充実 ・伊賀川の民間主体活用
東岡崎駅	来街者に対するおもてなしの玄関口	・観光客の玄関口としての優れた景観 ・交通手段相互の乗り換えが効率的かつスムーズに行える交通結節点 ・乙川にスムーズに誘導する歩行者動線 ・回遊性を高める情報発信（サイン等）
中央	岡崎の多様な価値を持つエリアに面する利便性の高い職・住・商地区	・周辺エリアからの波及効果による高い利便性 ・幅広い道路空間を活用した快適な歩行環境と駐車機能の両立 ・空き家へのオフィス機能立地 ・良質なマンション投資による居住促進と低層部への店舗･オフィス立地

（2023.3.31時点）

拠点・拠点間動線ビジョン

拠点	将来像
籠田公園	【エリアの価値を高める街のシンボルとしてのオープンスペース】 ・ 街なかの豊かな暮らしを支え、居住環境を向上させる質の高い空間 【多様な使い方の実現】 ・ 民間主体の多様な利活用を促進する制度や仕組みの実現 ・ 休日のイベント活用に加え、レジャーや交流あるいはオフィスとして、平日に日常的に利用される空間 【アクセス性の向上】 ・ カーシェアやサイクルシェアの導入等による多様なモビリティの設置、地下駐車場の活用等による高いアクセス性
橋詰広場 周辺	【街なかへのお迎え空間】 ・ 東岡崎駅からRF地区へ訪れる人に対するお迎え空間 【街と川の接点としての橋詰広場の形成】 ・ 川（桜城橋・乙川）と街の接続点として、乙川の風景を楽しみながら時間を過ごせるレジャーや交流の空間 ・ 将来の地先エリアの景観形成モデルとなる空間 ・ 車の通行ルートの検討による堤防道路の車の通行制限と、人と川のつながりの強化。
太陽の城跡地 周辺	【川と地先が一体となったRFの拠点】 ・ 岡崎ならではの岡崎城と乙川のビューを生かした、プレミアムな時間を過ごせる場所 ・ 岡崎を象徴する場所、将来の地先エリアの景観形成モデルとして、都市の格を感じさせる空間 ・ 岡崎への来訪者の滞在･活動拠点としてのホテル、コンベンション・バンケット、リバーベース機能（宿泊・交流機能空間） 【市民が都市空間を楽しむための川と暮らすコンテンツの充実】 ・ 川でのレジャーやアクティビティと堤内･地先での消費（飲食･購買）が一体的に楽しめる場所 ・ キャンプ・宿泊・BBQなどを織り交ぜた研修企画など、水辺で働く環境
北東街区	【QURUWAのおもてなし空間】 ・ 川と街が融合した岡崎の象徴的な風景を堪能できる空間 ・ QURUWAへの回遊を促す起点 【川と街との接続】 ・ 「かわ」「まち」を一体的に楽しみながら快適に過ごせる滞留空間 【交通結節点機能の補完】 ・ 東岡崎駅周辺と連携し、自家用車及び自転車利用者と公共交通機関がコネクト

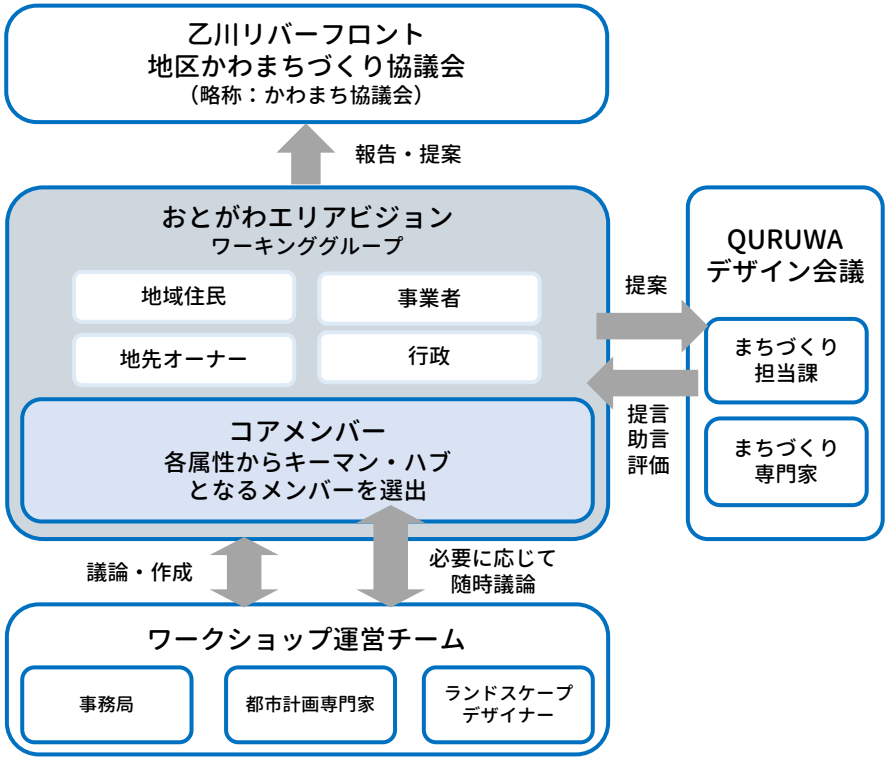
拠点	将来像
りぶら周辺	【質の高い空間】 ・ QURUWAの玄関口としてふさわしい、快適で高質な空間 ・ 岡崎を象徴する顔として、都心のオアシスとして市民の誇りとなる「セントラルパーク」 【りぶらと街をつなぐ機能】 ・ 南の岡崎公園、東の東海道へとつながる回遊環境とコンテンツ集積 ・ 歩行者優先の安全で快適な前庭 ・ イベント時はもちろん、日常的に多様な世代が行き交う憩いの場 【交通結節点化】 ・ 車での来街を受け入れる一定数の駐車場を確保しながら、バスやサイクルシェアなどの多様な公共交通の結節点
連尺通り 二七市通り 康生通り	【沿道建物と一体となった道路活用】 ・ 車の通行を制限し、歩行者優先の道路 ・ 沿道建物のコンテンツの歩道空間に滲み出しによる街の賑わいの再生 ・ 歩道を中心とした道路空間の利活用を促進する制度や仕組みの導入 【岡崎ならではとなるコンテンツの誘致】 ・ QURUWAの中でも、岡崎ならではとなるコンテンツと人が集まる場所 ・ 商店街再生に加えて、居住や職場の環境整備による、職住商近接の街 【歩いて楽しい景観の形成】 ・ りぶらと籠田公園を繋ぎ、歴史を受け継ぐ空間として、市民の誇りとなる景観
中央緑道	【エリアの価値を支える地域の前庭】 ・ 街なかの豊かな暮らしを支え、居住環境を向上させる質の高い空間 【街の象徴となる軸の形成】 ・ 桜城橋･籠田公園とともに街の象徴的な景観を形成 ・ 東岡崎駅と街なかをつなぐ軸 ・ 地域の参加により維持管理が図られる地域住民の前庭 【都市の中の自然が豊かで快適な散歩道】 ・ 歩行者優先で自然環境が豊かで快適な都市の中の歩行空間
乙川	【個性のある多様な河川空間のつながり】 ・ 個性の違うゾーンが乙川でつながっており、それぞれのゾーンの特性に合わせた活用がされている 【日々の気持ちによって、過ごし方が選べる空間】 ・ 生活圏内にある乙川を人々が日常的に活用している空間 ・ 自然を生かした使い方、都会的な活動をする使い方の両方ができる空間 ・ まちなかでありながら、自然による季節の移ろいを感じることができる空間 ・ イベントなど暮らしの中の特別な日にも乙川を利用できる空間 ・ 堤防道路から河川敷への起伏、屋内と屋外、日向と日陰、河川といった多様性のある空間 【地先と河川空間の一体的な活用】 ・ 地先空間、堤防道路、河川敷の一体的に活用することで、日常的な滞留空間を生み出す ・ スポーツ・飲食・ 宿泊などの可能な滞在スペースを有する河川活用の拠点 【新たな挑戦による文化の創出】 ・ 挑戦を受け入れる仕組みが整っており、これからつくりあげていく空間 ・ 許容度の高い広大な空間であり、様々なことが実現できる空間 ・ 屋外空間で気軽に集える場所があり、人々の出会い・語り合いの場となる空間 ・ 個性的な活用の担い手が多数表れ、新たな文化を創出

「おとがわエリアビジョン」の検討経緯

- 2017年度に策定した「おとがわエリアビジョン」を元に、2023度はビジョン改定を実施した。
- 乙川エリアに関わる地域住民、拠点事業者、民間プレイヤー、実行委員会（指定管理者）、行政がメンバーとなり、乙川エリアの目指すべき将来像を検討するビジョンワークショップを３回開催し、そこでの意見や、これまでの取組みからの知見を反映し、おとがわエリアビジョンの改定作業を実施した。改定時には多くの地域住民がワークショップに参加したことが特徴。

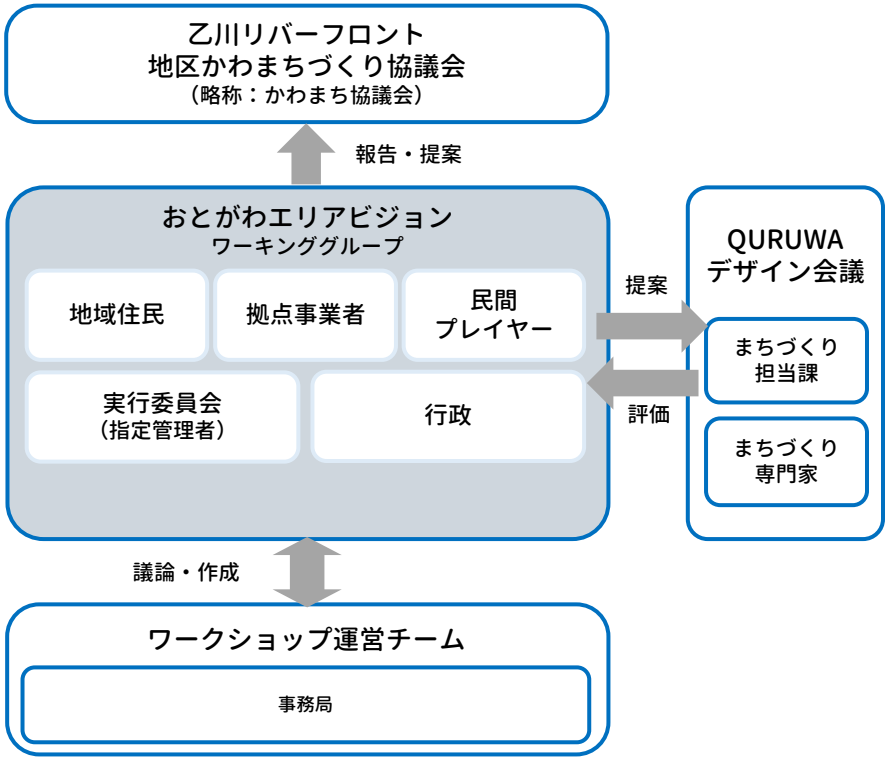
2017年度（ビジョン策定時）

■推進体制



2023年度（ビジョン改定時）

■推進体制



おとがわエリアビジョン更新ワークショップ_Day①【キックオフ】

開催概要

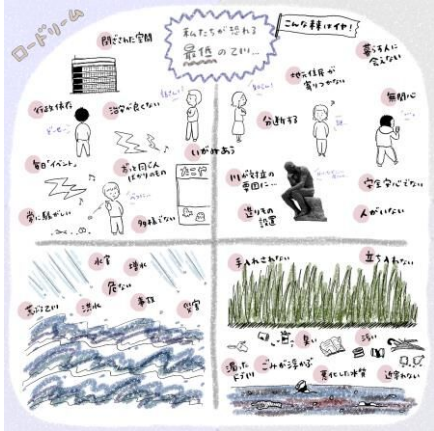
日　時：2022年11月22日（火）
場　所：Camping Office osoto Okazaki
参加者：27名

プログラム内容

過去の振り返りと未来のイメージング

- 乙川の変化（過去から現在まで）
- 理想の乙川・恐れている乙川

理想の乙川



恐れている乙川

ビジョンの種を集める

第1回目は、それぞれのメンバーが乙川で過ごしたおもいでから感じる“乙川と自身の変化”を語り合うことから始まりました。また、“理想の乙川”と“恐れている乙川”の両方を言葉にしてみることで、未来をかたち作っていくための種が、集まり始めました。

おとがわエリアビジョン更新ワークショップ_Day②【プロジェクト計画】

開催概要

日　時：2022年12月21日（水）
場　所：Camping Office osoto Okazaki
参加者：30名

プログラム内容

ビジョン案（あいことば）のディスカッション

- 「乙川の変化」、「理想の乙川」「恐れている乙川」に出てきたキーワードから、あいことばを作る
- 不安や疑問の声を出す・聞く
- 不安や疑問の声に配慮したあいことばを作る

あいことばを作る

第2回目は、みんなで大事にしていきたい、乙川エリアの「あいことば」を作りました。
理想や現実からキーワードを出し合い、時には不安や疑問も言葉にし、伝え、それも包み込むようなことばたちを、必死に紡ぎだしました。

テーマ	あいことば
自然・環境	おとがわの自然！感動の体験をあなたも
風景	岡崎らしい活動に支えられた 思い思いの風景
過ごし方「いつもの乙川」	つい子どもが遊ぶ、つい皆がごみを拾う、 自然と訪れる場所
使い方「特別な日の乙川」	認め合いながらほどほどに。 また遊びたいな！乙川
コミュニティ（つながり）	みんなで認め合い、みんなで守り、みんなで使う
周辺エリアとのつながり	いってきます～おかえりまで。 乙川から始まる岡崎ストーリー

おとがわエリアビジョン更新ワークショップ_Day③【プロジェクト発表】

開催概要

日　時：2023年2月1日（水）
場　所：Camping Office osoto Okazaki
参加者：28名

プログラム内容

あいことばを実現するための アクション案のディスカッション

- 事務局から、あいことばの改定案を提示・説明
- アクション案ブレスト・ディスカッション

あいことば実現プランを作る

第3回目は、「あいことば」を実現するために、どんなことができそうか？何が必要か？を、参加者みんなでざっくばらんに話し合いました。実現可能なことからツチノコまで、様々なアイデアがでていて、場は大いに盛り上がりました。みなさんからいただいたアイデアをもとに、事務局で最終版を作成します。

テーマ	ビジョンを実現するための具体アクション
自然・環境	アクション①：自然観察会＆子ども向け学習会の実施 アクション②：おとがわ掲示板の設置 アクション③：クリーン大作戦の実施
風景	アクション①：QURUWA百景・フォトコンテストの実施 アクション②：整った景観の整備 アクション③：桜を残す方法を考える
過ごし方「いつもの乙川」	アクション①：道具の貸出し アクション②：川でのあそび方掲示板 アクション③：ワークスペース×ピクニック×学生
使い方「特別な日の乙川」	アクション①：イベントの情報発信の実施 アクション②：結婚式の会場として利用 アクション③：春・夏・秋・冬で楽しめるお祭りの実施
コミュニティ（つながり）	アクション①：焚き火トークの開催 アクション②：KCBMの乙川版の開催 アクション③：あいさつをする
周辺エリアとのつながり	アクション①：周辺エリアとつながるモビリティ アクション②：乙川をSUPで下る アクション③：QURUWA周遊ツアーの開催

	担当課・担当者	プロジェクト
行政	企画課	
	デジタル推進課	
	商工労政課	
	観光推進課	
	まちづくりデザイン課	
	拠点整備課	
	公園緑地課	
	都市施設課QURUWA戦略係	
	リバーライフ推進委員会	ソウルフードジャム
		アウトバックガレージマーケット
		フィールドディスカバリーゲーム
	スノーピークビジネスソリューションズ	Camping Office
		Local work Tourism
	ONE RIVER	川びらき・川あそび・川ぐらし
		Let it Camp
		おとがわリバークリーン
	ツツイエンターテイメント	岡崎城下舟あそび
	waileo SUP school＆tours	乙川SUP体験
	サイクルぴっとイノウエ	スポーツバイク・マウンテンバイク体験会
	STUDIO ALMA	おとがわサンデーヨガ
	オカザキリバーサイドマラソン実行委員会	オカザキリバーサイドマラソン
	乙川ナイトマーケット実行委員会	乙川ナイトマーケット
	犬市場実行委員会	犬市場
	ハセマ実行委員会	HANDMADE SELECT MARKET
	mono and	オトマルシェ
	トライアスロンスクールST	ジュニアランニングスクール
	NPO法人おかざき農遊会	新鮮野菜の朝市
	岡崎星と遊ぶ会	おとがわ星空観望会・月待会
	あいち橋の会	桜城橋ふき・殿橋あらい

個別ヒアリング実施者

個別ヒアリングは乙川エリアで具体プロジェクトを推進している行政担当課8課と民間16事業者（21プロジェクト）を対象に行った。

個別ヒアリング内容

個別ヒアリングの質問事項は以下の５項目を共通項目として実施した。

①プロジェクトを実施するに至ったきっかけ
②プロジェクトの現状と課題
（現在の実施状況／実施して見えてきた成果／実施する上での課題）
③今後の事業スケジュール
④プロジェクト実施の目的（短期目標／中期目標／長期目標）
⑤おとがわエリアビジョン実現に向けて自身の事業でできること

個別ヒアリングの様子

おとがわエリアビジョン更新業務

ヒアリングシート【事業者・市民活動団体用】

ヒアリング実施日：2022年12月日
ヒアリング担当者：石原

■プロジェクトの基本情報

プロジェクト名	おとがわリバークリーン		
組織名・団体名	ONE RIVER	担当者	岩ヶ谷 亮
開始年月	2017年	実施年月	5年間
実施ゾーン			
プロジェクト概要*	毎月第２土曜日に実施してる環境美化（ゴミひろい）活動。ONE RIVERの声かけにより集まった有志により、約１時間河川敷や川辺に落ちているゴミひろいを行っている。また、年に一度12月の第２土曜日は規模を拡大しイベント形式にして実施。いつものゴミひろいに加えてゴミの分別やワークショップなどを行い、参加者ともにそのゴミがどこから来たのかを考える場を設けている。		

■お聞きしたいこと

①プロジェクトを実施するに至ったきっかけ	社会実験（おとがワ！ンダーランド）実施時にアクティビティなどのプログラム実施者同士数名で、自分たちで使う場所は自分たちの手できれいにしよう！と始めたのがきっかけ。その後、数を重ねるごとに少しずつ参加者が増えていき、参加者の子どもたちが川辺に落ちているゴミを探すのが楽探しみたいで楽しい！と発想し今では、たくさんの子どもたちが参加してくれるプログラムとなった。ゴミをひろうだけではなく参加者同士が交流したり、情報交換をする場となっている。
②プロジェクトの現状と課題	【現在の実施状況】　※実施回数・来場者数・売上げ等 ・2017年〇月の開始から現在に至るまで、〇回のリバークリーンを実施している。 ・2021年から春に行われる桜まつりに合わせて「桜まつりクリーン」を実施したり、ゴミを出さないことを目指し、地産木材を使用して制作した「くるくるトレイ」プロジェクトを始動するなど活動の広がりも生まれている。 ・毎回20～30名ほどの方が参加し、近年では地域の方々との連携や企業参加の方々も増え始めている。 【実施して見えてきた成果】 ・指定管理者による日々の清掃活動の成果もあると思うが、年々ゴミは減ってきれいになってきている。また、リバークリーンへの参加者が数を重ねることに増えている。 ・ゴミをひろうだけではなく、子どもたちが遊んだり、大人がおしゃべりをしたりとゴミひろい後の時間が交流の場になっている。 ・昨年から、乙川で事業を実施する団体から寄付をいただくようになり、それら寄付金を使い、ゴミ袋やバケツ等を購入するという良いサイクルが生まれている。 【実施する上での課題】 ①拾ったごみの処分 拾ったごみを置いておく場所がない。また、処分費もONE RIVERの活動費から捻出しているが、企業または個人などに負担していただくことで、ゴミひろいではないリバーク

ヒアリングシート

第 2 章

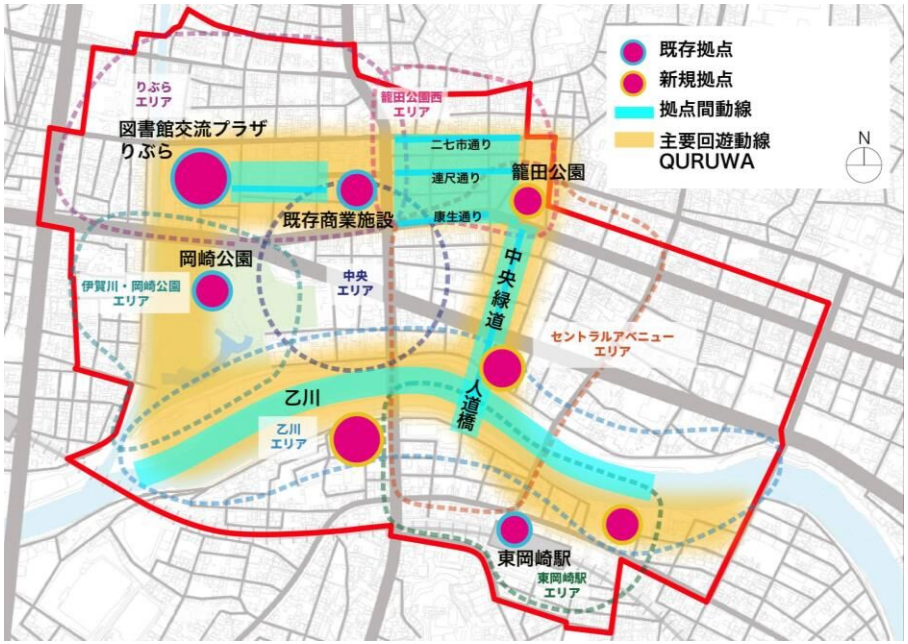
乙川エリアの基本情報

QURUWAとは

- QURUWA地区、約157haの多様な魅力を味わうことができる約3kmのまちの主要回遊動線。
- 名鉄東岡崎駅、乙川河川緑地、桜城橋、中央緑道、籠田公園、りぶら、岡崎公園など公共空間の各拠点を結ぶ主要回遊動線。かつての岡崎城跡の「総曲輪（そうぐるわ）」の一部と重なること、また、動線が「Q」の字に見えることから、「QURUWA」と命名。

QURUWA戦略とは

- QURUWA戦略とは、QURUWA地区内の豊富な公共空間を活用して、パブリックマインドを持つ民間を引き込む公民連携プロジェクト（QURUWAプロジェクト）を実施することにより、その回遊を実現させ、波及効果として、まちの活性化（暮らしの質の向上・エリアの価値向上）を図る戦略。



桜城橋

北東街区
（OTO RIVERSIDE TERRACE）

籠田公園

中央緑道

通りの再編
（康生通り・連尺通り社会実験）

公共空間活用（りぶら前）

QURUWA地区内にある主要拠点の利用者数や通行人数等を示す。

①河川空間であることのポテンシャル
- 自然豊かな空間である。
- 地形（水面・河川敷・階段護岸）があり、水面が近い。
- 桜の名所であり、四季による豊かな変化がある。
- 時間帯によって変化する景色がある。

②まちなかであることのポテンシャル
- 自然豊かな空間でありながら、まちなかで事業を営み、人々が生活するエリアにある。

③活用することに対するポテンシャル
- 既存の活用主体が少なく、これからの活用に広がりがある。
- QURUWAの公共的空間の中でも最大規模の空間であり、挑戦的な取組ができる。
- 河川と一体的に活用できるまとまった公共用地（太陽の城跡地、桜城橋・桜城橋橋詰広場、北東街区）があり、屋外と屋内空間の連動した活用ができる。

④歴史的なポテンシャル
- 岡崎城を眺めることができる。
- 岡崎城跡菅生川端石垣がある。（全長約400m、一連の石垣城壁としては日本最長級。）

豊かな自然

河川敷の桜

河川と一体的な土地利用による空間活用

まちなかにある乙川

まちなかで使える最大規模の空間

岡崎城を眺めることができる

乙川の歴史

中世
(1185年～)

乙川はかつては菅生川と呼ばれ、1399年に大きく流路を変えられている。それまでは現在の殿橋よりやや下流で大きく曲がり、現在の占部川に近い当たりを流れていたが、六名堤を築堤し乙川を現在の流路に変更した。それにより、矢作川から直接菅生や明大寺に船で入れるようになり、まちの発展にも大きな影響を与えたと言われている。

▼

近世
(1603年～)

舟運が盛んにおこなわれ、生活を支える道としての乙川

1600年代～昭和のはじめは乙川の航路を使い塩、肥料、紙、瀬戸物、呉服など生活必需品を運び込み、味噌や石製品などを江戸へ向けて出荷をしていた。

▼

近代
(1868年～)

航路としての役目を終えるも、紡績の興隆を支える水に

1882年の９月長雨が続き、乙川の堤防が切れて大きな水害が出る。現在の久後崎町付近の堤防が80~90mにわたり決壊し濁流は西尾まで続き69村にわたり田畑3,000ha余りを飲み込んでその秋の収穫は全滅。浸水家屋2,000戸、流失家屋30戸、死者40名ほどとも言われている。
この洪水を「三嶋切れ」や「久後先切れ」と言い、「水害追悼碑」が今も残っている。その後堤防の改修工事を行い1885年に完成。
それまでは渡し舟や水潜橋だったところに次々に橋が架かる。（1923年明神橋、1927年殿橋）
陸路や鉄道の発達により舟運は衰退し、航路としての乙川は役目を終えていく。一方でガラ紡が興隆しその水車を回す役割を乙川やその支流が担っていくこととなり、産業の発展に大きく寄与する。
1881年には乙川沿いの大西町に官営愛知紡績所が作られる。

▼

現代
(1926年～)

ふたたび、川とともにある暮らしに向けて

1932年7月巴川上流で豪雨となったため三河地方の各河川が増水。堤防の決壊や山崩れが相次ぎ、岡崎市は死者４名、行方不明者１名その他住宅の流出や浸水被害、堤防の決壊８カ所、橋流失15ヶ所、山崩れ6か所などの被害が出た。明大寺橋も流出し、1937年に現在の橋に架けかえられた。
戦後、乙川河川敷は桜まつり、花火大会など市民をあげての祭りがおこなわれるとともに貸しボートや子どものあそび場として利用される場所となった。また1963年に乙川頭首工が作られ農水としての利用も進んでいく。一方で水質の汚染も見られ、1970年のみかちゃんの放流開始など市民による美化活動も見られるようになっていく。1980年代には治水を目的に河川敷公園の整備がされ、現在乙川に見られる階段護岸や潜水橋が作られ、あそび場としての機能は失われていく。その後、2015年、国土交通省「かわまちづくり支援制度」に岡崎市が登録され、再び乙川の豊かな水辺を活かしたまちづくりが進んでいる。

おとがわで暮らす生き物たち

乙川には、鳥や魚をはじめとする様々な生き物が住んでいる。河川の整備や周辺の変化に対応しながら暮らしている。

鳥

※出典：岡崎野鳥の会、鳥たちとともに、30年（岡崎野鳥の会 創立30周年記念誌）

2018年に明代橋～竜美ヶ丘会館前までで観察された鳥は64種
2000~2002年に岡崎公園で観察された鳥は58種
留鳥であるスズメ、キジバト、ハシボソガラス、ムクドリ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、カワウ、カイツブリ、カワセミ、コゲラ、ハシブトガラス、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、イカルがよく見られる。また、季節によって夏にはツバメ、冬にはコガモ、モズ、ヒドリガモ、ツグミ、キセキレイもよく観察されている。

スズメ

キジバト

ムクドリ

セグロセキレイ

カワウ

カワセミ

近年、観察されている鳥の種類は減少傾向が見られ、観察時期などにも半かがある。これは気候の変動も考えられるが、治水や舟運の安全のために行われている草原や中洲の減少、中洲の樹木の伐採などによる川の様相の変化とも関係があると思われる。乙川頭首工が閉まり水が貯められている時期が多くなると、その間中州は水面下になるために冬季のカモ類やチドリなどの休息場所が少なくなる一方で、カイツブリやオオバンなどゆったりとした水のある環境を好む鳥はよく見られるようになっている。また、樹木の高齢化等によるメンテナンスや景観維持の観点から、木が伐られ明るくなったことによる鳥の減少も指摘されている。

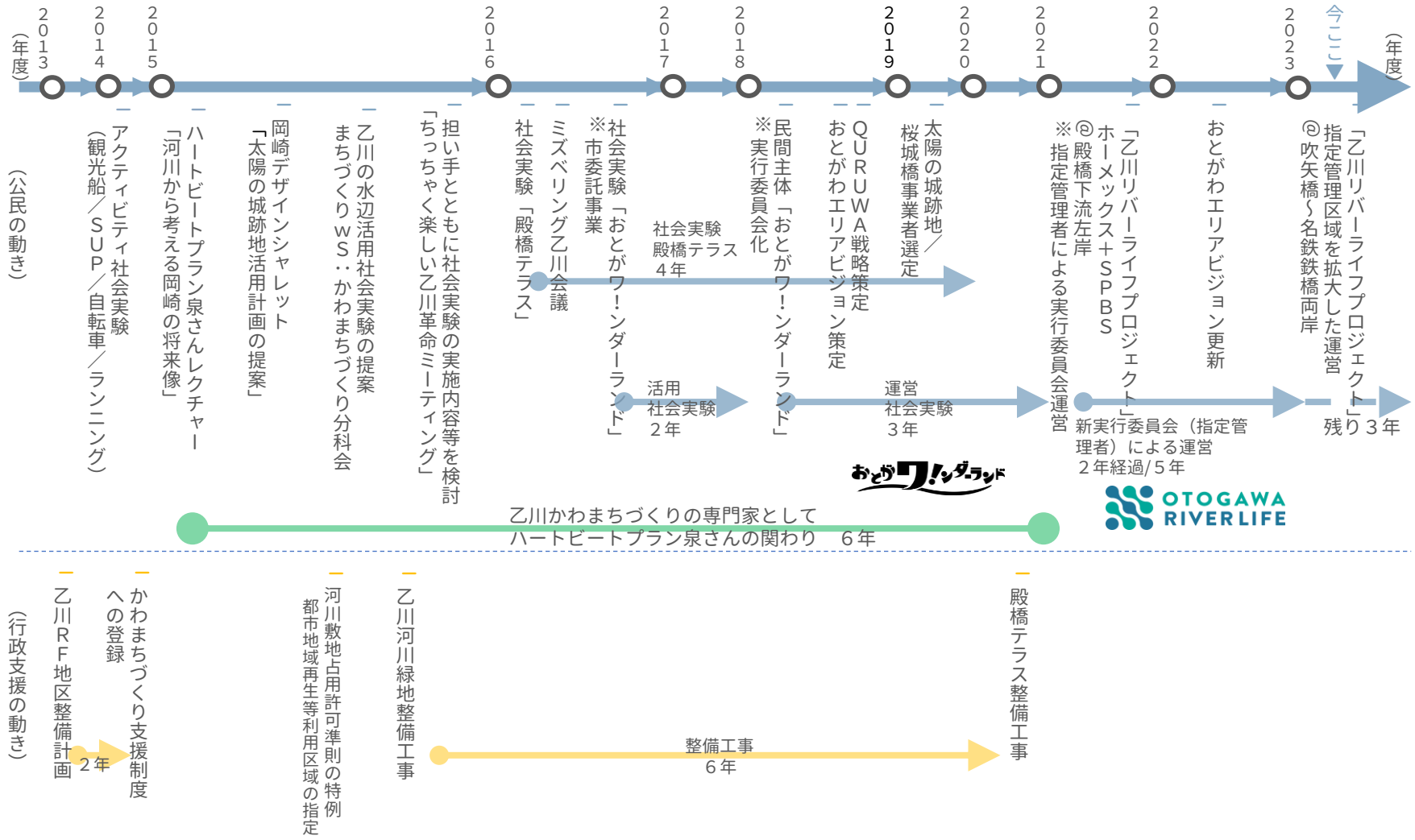
水辺の生き物

鯉（みかちゃん）、ニゴイ、カマツカ、ゼゼラ、オイカワが日常的に見られる。また、鮎、ヤツメウナギ、二ホンウナギ、モクズガニ、クサガメ、イシガメやスッポンも観察されている。
1963年に乙川頭首工が完成して以来、水が貯められ、水質の悪化が見られるようになり、鮎の遡上も制限されるようになった。その後下水道の整備や環境意識の高まりにより水質は向上してきたが、治水を目的とした河川工事の影響などもあり水位は低下したままである。

鮎

鯉（みかちゃん）

乙川かわまちづくりの公民連携プロセス



第３章

乙川エリアの将来像（目指す姿）

乙川エリアの将来像

自然と都市が交わる暮らし

自然・環境	風景	特別な日の乙川（使いかた）	いつもの乙川（過ごし方）	コミュニティ（つながり）	周辺エリアとのつながり
身近に川の恵み（生態系）を感じ、見方が変わり、感動の体験が起こる場所	なつかしさと新しさが調和する「岡崎らしさ」に支えられた風景が見つかる場所	乙川ならではの使いかたや楽しみが生まれる、また遊びに行きたくなる場所	つい子どもが遊ぶ、つい皆がゴミをひろう。つい訪れたくなる場所	対話を重ね、みんなが認め合い、みんなで乙川に意識が向いていく場所	まちとまち、森とまち、人と人。多様なストーリーからつながる場所

自然・環境

身近に川の恵み（生態系）を感じ、見方が変わり、感動の体験が起こる場所

【グループワークの議論のポイント】

→自然の生態系（川の恵み）が感じられる

→水害や水難事故に対する脅威に対する備えの大切さ

→川の水をいかに綺麗にしていくかの重要性

→身近に自然があることを気づいてもらう仕掛けの必要性

→一方的に教えるのではなく、自分で自然の楽しさを見つける喜び

→楽しむ姿を見せること、伝えていくことで乙川に仲間が増えていく喜び

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
自然観察会＆子ども向け学習会の実施
（鮎つかみ体験、川の変化観察、岩石探検、生き物・自然観察…）

アクション②
おとがわ掲示板の設置
（こんな魚・鳥がいるよ！、乙川物語、生き物・植物のレア度看板）

アクション③
クリーン大作戦の実施
（乙川クリーン大作戦の日、ゴミ拾いコンテスト）

風景

なつかしさと新しさが調和する「岡崎らしさ」に支えられた風景が見つかる場所

【グループワークの議論のポイント】

→自然への感謝や共生意識を感じることができる乙川

→人の気配を感じ、安心感がある乙川

→多様な過ごし方が見え、過ごしからのヒントがあふれている風景

→活動と空間と建物を一つに包含する風景

→人工的な看板や建築と自然が調和することで生まれる「岡崎らしさ」

→思い思いの活動や思いが許容される「岡崎らしさ」の実現

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
QURUWA百景・フォトコンテストの実施
（みんなが乙川の中で好きな場所を言える）

アクション②
整った景観の整備
（建物の高さ・色・広告等のコントロール）

アクション③
桜を残す方法を考える
（桜のある風景を残したい。残す方法を考えたい）

特別な日の乙川（使いかた）

乙川ならではの使いかたや楽しみが生まれる、また遊びに行きたくなる場所

【グループワークの議論のポイント】

→相手の立場を認め合いながら「ほどほど」に楽しむ使い方の発明

→開かれた場所の使い方。限られた人の特別な日にならない工夫

→乙川でしかできないことの実現。四季を堪能できる場所の楽しみ方の発明

→子ども達の声があふれる場所。親子で楽しめることができる乙川の実現

→安全に川を楽しむための意識の向上

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
イベントの情報発信の実施
（一元化された看板やウェブサイトでのPR、多様なイベント情報の発信）

アクション②
結婚式など人生の節目の会場として利用
（まちの知り合いや事業者とともにつくるウェディング）

アクション③
春・夏・秋・冬で楽しめるお祭りの実施
（こどもが遊べる定期的なイベント、乙川まつり）

いつもの乙川（過ごし方）

つい子どもが遊ぶ、つい皆がゴミをひろう。つい訪れたくなる場所

【グループワークの議論のポイント】

→いろいろな人が思い思いの過ごし方ができる場所へ

→子どもが安心して遊べる場所へ

→子どもにとって魅力を感じることができる場づくりの必要性

→ついゴミをひろいたくなる乙川

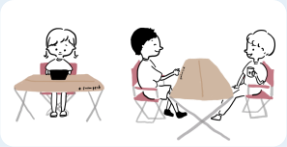
→イベントで使われていない日も思い思いの過ごし方ができる乙川

→人が集まり思い思いの過ごし方の中から自然と生まれる秩序やルールの構築

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
道具の貸出し
（虫かごやバケツ、ライフジャケットなど自然と触れ合う道具の貸出し）

アクション②
川でのあそび方掲示板
（乙川でできること看板、水きりの記録ランキング表）



アクション③
ワークスペース×ピクニック×学生
（まちで働くことができる、ピクニック、学生は学校帰りにも立ち寄れる）

コミュニティ（つながり）

対話を重ね、みんなが認め合い、みんなで乙川に意識が向いていく場所

【グループワークの議論のポイント】

→使われ方が増えいろいろなコミュニティ（つながり）が増えた

→団体や個人が増えることでぶつかりあう価値観。それぞれを尊重し合う、認め合うことの必要性

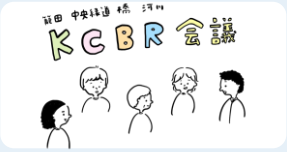
→環境を守るために、みんなで共通の意識（川に意識を向ける）を持つこと

→普段あまり川のことや環境のことに意識を向けれていない人に投げかけれるような工夫

→コミュニケーションの場をつくって対話を重ねることでつくる相互理解

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
焚き火トークの開催
（みんなで焚き火、日本一の焚火大会、木材の循環をつくる）



アクション②
KCBMの乙川版の開催
（乙川について地域住民同士が語り合う場、他エリアとの情報交換）

アクション③
あいさつをする
（日常的に散歩をしている人へあいさつ運動の普及）

周辺エリアとのつながり

まちとまち、森とまち、人と人。
多様なストーリーからつながる場所

【グループワークの議論のポイント】

→多様な乙川の使い方が暮らしにつながっている

→乙川を介して山間部（額田）とつながっている

→周辺エリアとつながるストーリー（歴史等の文脈）の発掘

→電車から見る。玄関口としての乙川

【ビジョンを実現するための具体アクション】

アクション①
周辺エリアとつながるモビリティ
（シェアサイクル、電動キックボード、少人数カート）

アクション②
乙川をSUPで下る
（上流部と中継、SUP＋歩きでつながりを体感）

アクション③
QURUWA周遊ツアーの開催
（乙川から始まる歴史ツアー、周辺商店とつながる食べ歩き・飲み歩き）

（1）ゾーニングの考え方

・乙川エリア全体を「１.地域特性」と「２.想定されるエリアマネジメントの主体」によって６つにゾーニングする。
・その上で各ゾーンにプロジェクトを落とし込むことにより、主体を明確にするとともにゾーンごとの特色を出していく。

１．地域特性による分類

- 地先用途、周辺環境、河川との関係性等の特性によって河川敷＋地先空間を６つのゾーンに分類する。
- ゾーンごとの特色を明確にして、魅力を強化する

２．エリアマネジメントの主体

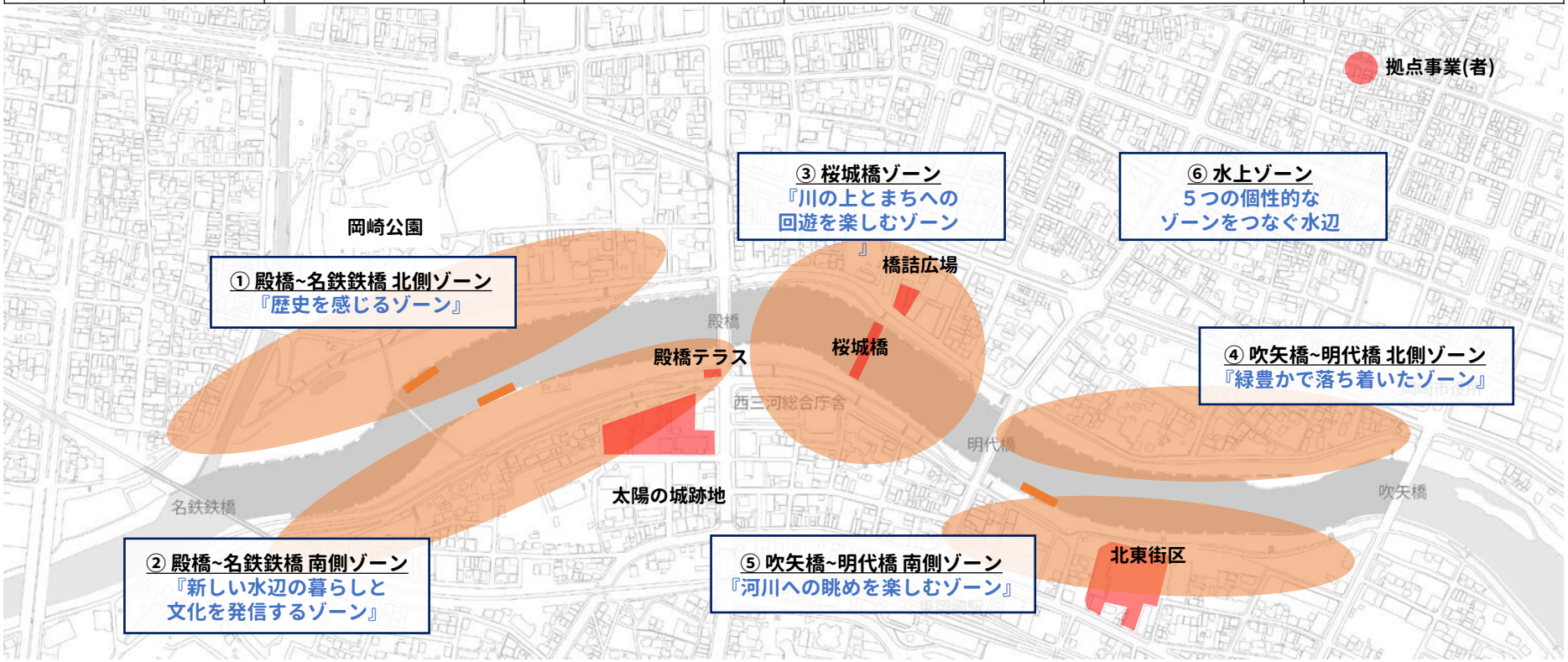
- 既存の施設や今後予定されている施設計画を基に、ゾーンの核となる拠点施設を設定。
- 拠点施設運営者が周辺をマネジメントする主体となることを想定してゾーニングする。

（2）地域特性による分類

		①殿橋~名鉄鉄橋北側ゾーン	②殿橋~名鉄鉄橋南側ゾーン	③桜城橋ゾーン	④吹矢橋~明代橋北側ゾーン	⑤吹矢橋~明代橋南側ゾーン	⑥水上ゾーン
		歴史を感じるゾーン	新しい水辺の暮らしと文化を発信するゾーン	川の上とまちへの回遊を楽しむゾーン	緑豊かで落ち着いたゾーン	河川への眺めを楽しむゾーン	５つの個性的なゾーンをつなぐ水辺
地域特性による分類	地先利用	高層マンション／ホテル	太陽の城跡地／住宅（河川敷地内）等	飲食／ホテル／住宅	住宅／寺／駐車場	北東街区／明代橋公園／吹矢橋公園／寺	―
	拠点となりうる公共空間	―	太陽の城跡地／殿橋テラス	桜城橋／桜城橋橋詰広場／西三河総合庁舎等	―	北東街区／明代橋公園／吹矢橋公園	太陽の城跡地（リバーベース機能）
	河川との関係性	河川敷へのアクセスが良い／河川敷が広い／船着場がある	河川敷へのアクセス性が高い／河川敷が広い／船揚場がある	河川敷が狭い	河川敷が狭い	堤防道路が歩行者専用であり地先空間と河川敷が一体的な活用ができる／船着場がある	―
	自然環境	樹木が少なく河川への視界が開けている、ビオトープ（ひょうたん池）	緑が豊かである一方、河川への視界が開けていない	緑が豊かである一方、河川への視界が開けていない	緑が豊かである一方、河川への視界が開けていない	低木であり、視界が開けている	まちなかにある豊かな河川
	その他	岡崎城からのアクセスが良い、歴史的に価値のある石垣がある	河川敷からの岡崎城への眺望がよい	桜城橋の完成により人の流れが変化する駅から中央緑道、籠田公園に繋がる主要な動線上にある	地先に寺社があり、地先にも緑が多い	乙川エリア再生の旗揚げとなる北東街区有効活用事業がある	―
マネジメント主体候補		沿道経営体（地先有志）等	太陽の城跡地事業者／殿橋テラス事業者等	桜城橋・橋詰広場事業者	沿道経営体（地先有志）等	北東街区事業者	水上活用事業者等

（3）沿川ゾーンの特徴

①殿橋~名鉄鉄橋 北側ゾーン	②殿橋~名鉄鉄橋 南側ゾーン	③桜城橋ゾーン	④吹矢橋~明代橋 北側ゾーン	⑤吹矢橋~明代橋 南側ゾーン	⑥水上ゾーン
歴史を感じるゾーン	新しい水辺の暮らしと 文化を発信するゾーン	川の上とまちへの 回遊を楽しむゾーン	緑豊かで落ち着いた ゾーン	河川への眺めを 楽しむゾーン	５つの個性的な ゾーンをつなぐ水辺
岡崎城や歴史的な石垣といった歴史資産との連携を行うゾーン。	先行的に実施している水辺活用や拠点となる太陽の城跡地により、乙川エリアにおける新しい水辺の暮らしや使い方としての文化を発信するゾーン。	乙川エリアの他のQURUWAのエリアをつなげるゾーン。	緑が豊かで、用途として寺や住宅等が多く落ち着いたゾーン。	堤防道路が歩行者専用空間であることに加え、河川へ視界が開けており、歩行者が安全に河川への眺めをゆっくりと楽しめるゾーン。	５つの個性的なゾーンの橋渡しとなるゾーン。

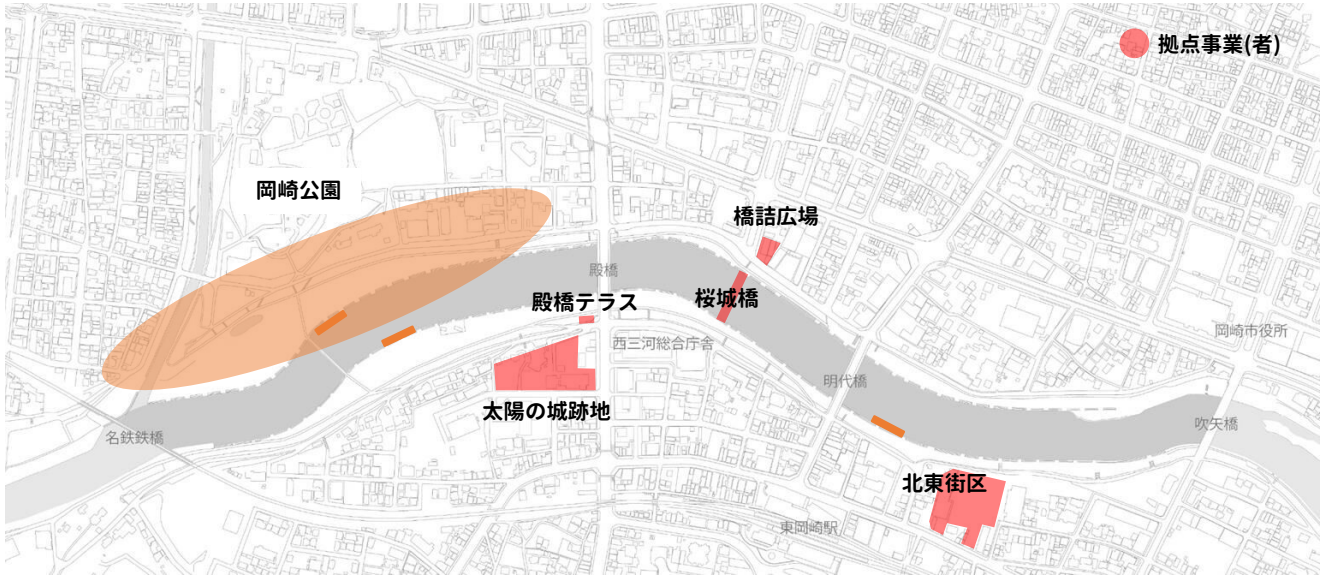


①殿橋～名鉄鉄橋 北側ゾーン

歴史を感じるゾーン

岡崎城や歴史的な石垣といった歴史資産との連携を行うゾーン。

【ゾーンの特徴をつくるポイント】
→岡崎城・岡崎公園
→歴史的価値のある石垣
→菅生神社・龍城神社
→川沿いの高層マンション群
→伊賀川との合流地点
→ビオトープ（ひょうたん池）
→広大な河川敷
→舟着場



■ゾーンの特徴

岡崎城・岡崎公園
このゾーンは岡崎城・岡崎公園に隣接している。歴史資産との連携が重要。

歴史的価値のある石垣
岡崎城以外にもお堀や石垣など歴史的価値のある遺構が多い。写真は岡崎城跡の南側を区画していたとされる菅生川端石垣。

菅生神社・龍城神社
川沿いと岡崎公園内に二つの神社を有している。菅生神社では夏に菅生祭が行われ、８月の花火大会と同日には「鉾舟神事・奉納花火」が執り行われている。

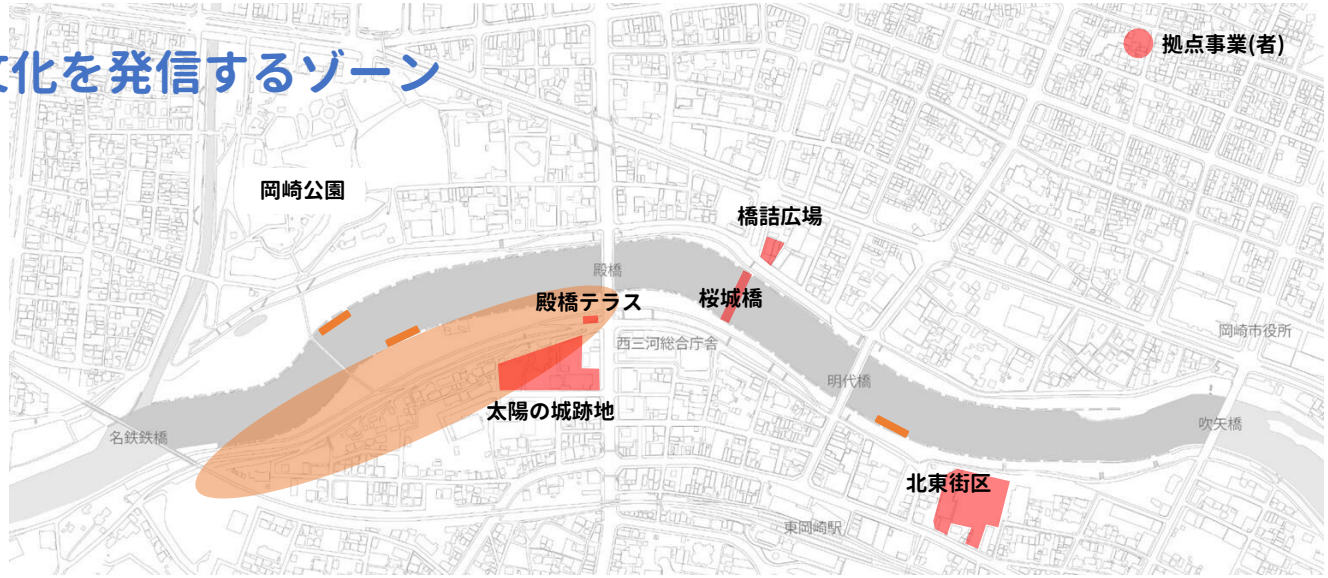
広大な河川敷
乙川エリア内で一番広い河川敷を有している。このスペースを活用し、市が主催する桜まつりや花火大会の他、大型イベントの実施などで活用される。

②殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン

新しい水辺の暮らしと文化を発信するゾーン

先行的に実施している水辺活用や拠点となる太陽の城跡地により、乙川エリアにおける新しい水辺の暮らしや使い方としての文化を発信するゾーン。

【ゾーンの特徴をつくるポイント】
→太陽の城跡地
→殿橋テラス
→岡崎城への眺め
→広大な河川敷
→豊かな緑（桜並木）



■ゾーンの特徴

太陽の城跡地
QURWUAプロジェクト（拠点事業）の一つに位置付けられている開発用地。現在は暫定利用として関係者駐車場やリバーベースが設置されている。

殿橋テラス
2021年に新設されたテラス。2016年～2019年までの４年間で実施した実証実験の成果を踏まえ常設。

岡崎城への眺め
岡崎城からの眺めが良好。とくに殿橋橋詰めからは乙川→岡崎城をしっかり眺めることができる。

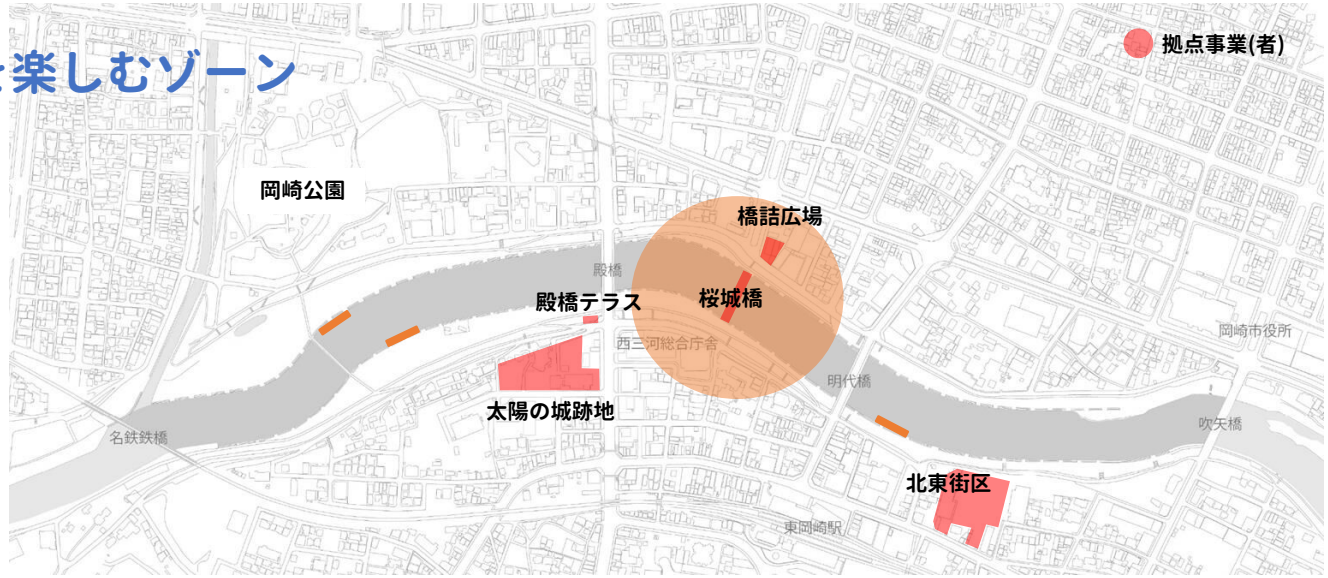
広大な河川敷
乙川エリアで二番目に広い面積を有する河川敷。リバーベースやトイレ等へのアクセスから、2016年以降はかわまちづくりの舞台として活用されている。

③桜城橋ゾーン

川の上とまちへの回遊を楽しむゾーン

乙川エリアの他のQURUWAのエリアをつなげるゾーン

【ゾーンの特徴をつくるポイント】
→桜城橋
→桜城橋橋詰広場
→他エリアとの連続性
→乙川への眺望
→緑豊かな堤防道路



■ゾーンの特徴

桜城橋
2020年3月に完成したQURUWAエリアの南北方向の動線をつなぐ要となる拠点（橋上公園）。橋上は公園利用が可能でイベント等が実施される。

桜城橋橋詰広場
桜城橋たもとにある橋詰広場（かわしん跡地）。橋上公園とセットでの利活用が望まれている。2021年にトイレが新設された。

他エリアとの連続性
桜城橋から中央緑道、籠田公園へと連続性をもった空間整備がされ、南北軸を形成している。桜城橋から籠田公園までの総称を「天下の道」と呼ぶ。

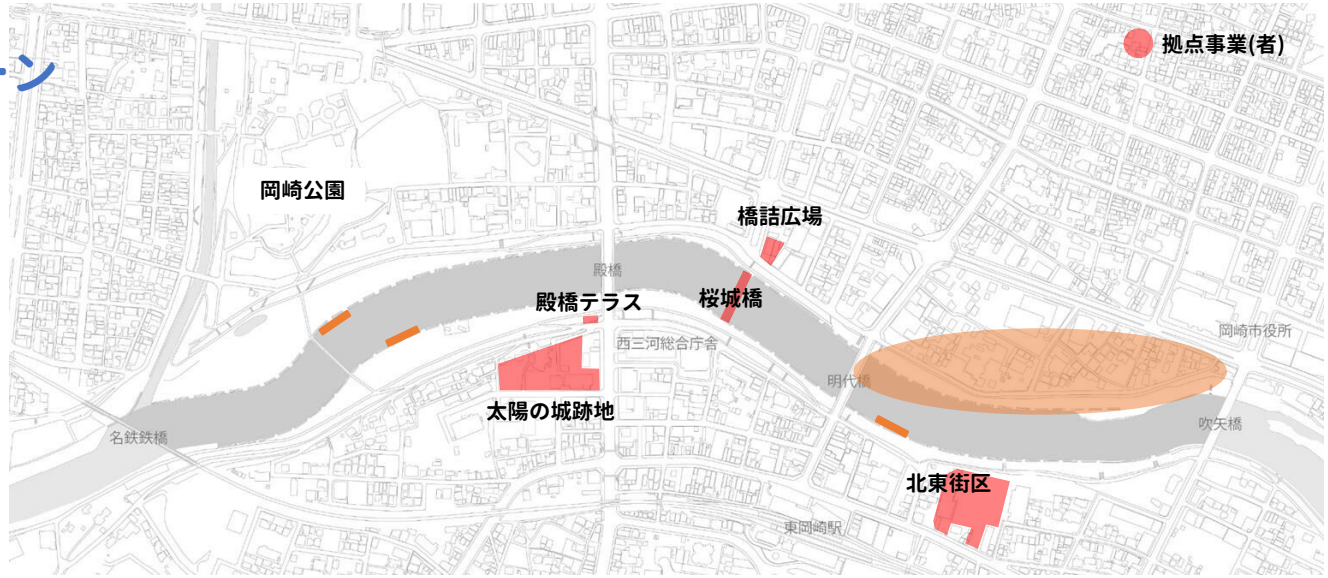
乙川への眺望
桜城橋上からは乙川への眺望も良好。橋上から東側には乙川の水源地である額田の山々を望むことができ、流域のつながりを実感できる。

④吹矢橋～明代橋 北側ゾーン

緑豊かで落ち着いたゾーン

緑が豊かで、用途として寺や住宅等が多く落ち着いたゾーン。

【ゾーンの特徴をつくるポイント】
→満性寺・東泉寺・蜜峰寺
→川沿いの住宅地
→緑豊かな堤防道路



■ゾーンの特徴

満性寺・東泉寺・蜜峰寺
ゾーン内に3つのお寺があり、これらも他ゾーンに比べると落ち着いた印象を生み出す要因の一つになっている。

川沿いの住宅地
こちらのゾーンは他に比べると川沿いの住宅・駐車場利用が多く、そのため生活圏として、落ち着いた印象がある。

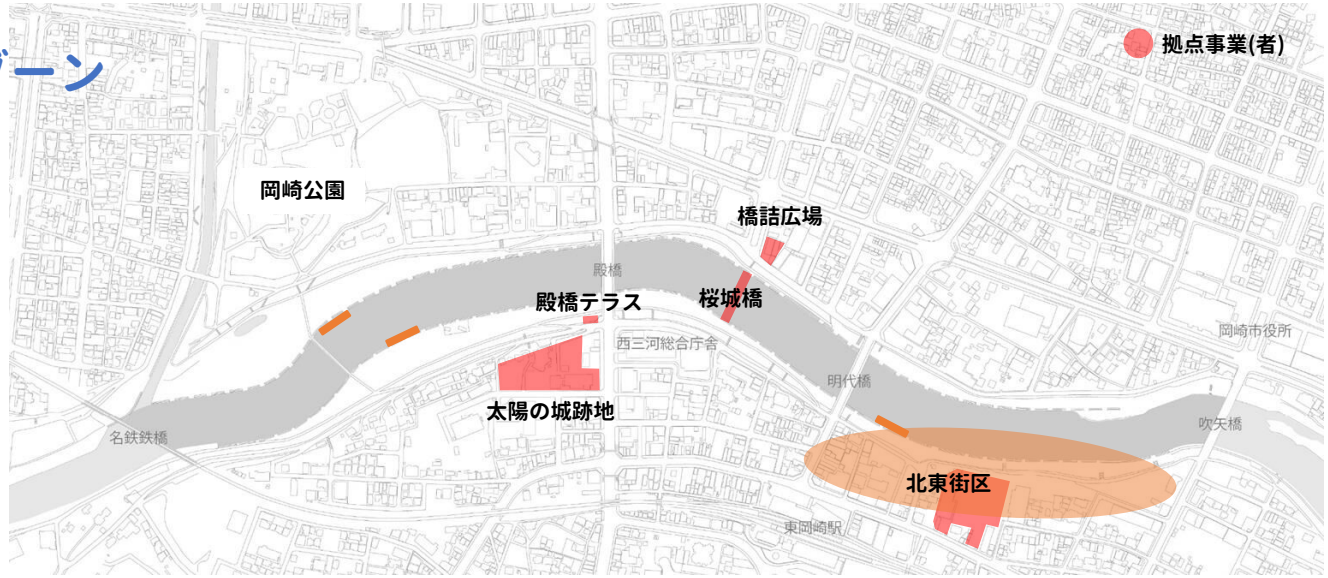
緑豊かな堤防道路
堤防道路及び河川敷の幅も狭く、イベント活用というよりは日常的な散歩やランニング等で利用されている。

⑤吹矢橋～明代橋 南側ゾーン

河川への眺めを楽しむゾーン

堤防道路が歩行者専用空間であることに加え、河川へ視界が開けており、歩行者が安全に河川への眺めをゆっくりと楽しめるゾーン。

【ゾーンの特徴をつくるポイント】
→北東街区
→東岡崎駅・ペデストリアンデッキ
→川沿いの歩行者専用道路
→岡崎場へのビスタライン
→船着場



■ゾーンの特徴

北東街区
2019年に完成した東岡崎駅から直結の商業施設。名称はオトリバーサイドテラス。QURUWAプロジェクト（拠点形成事業）の一つに位置付けられている。

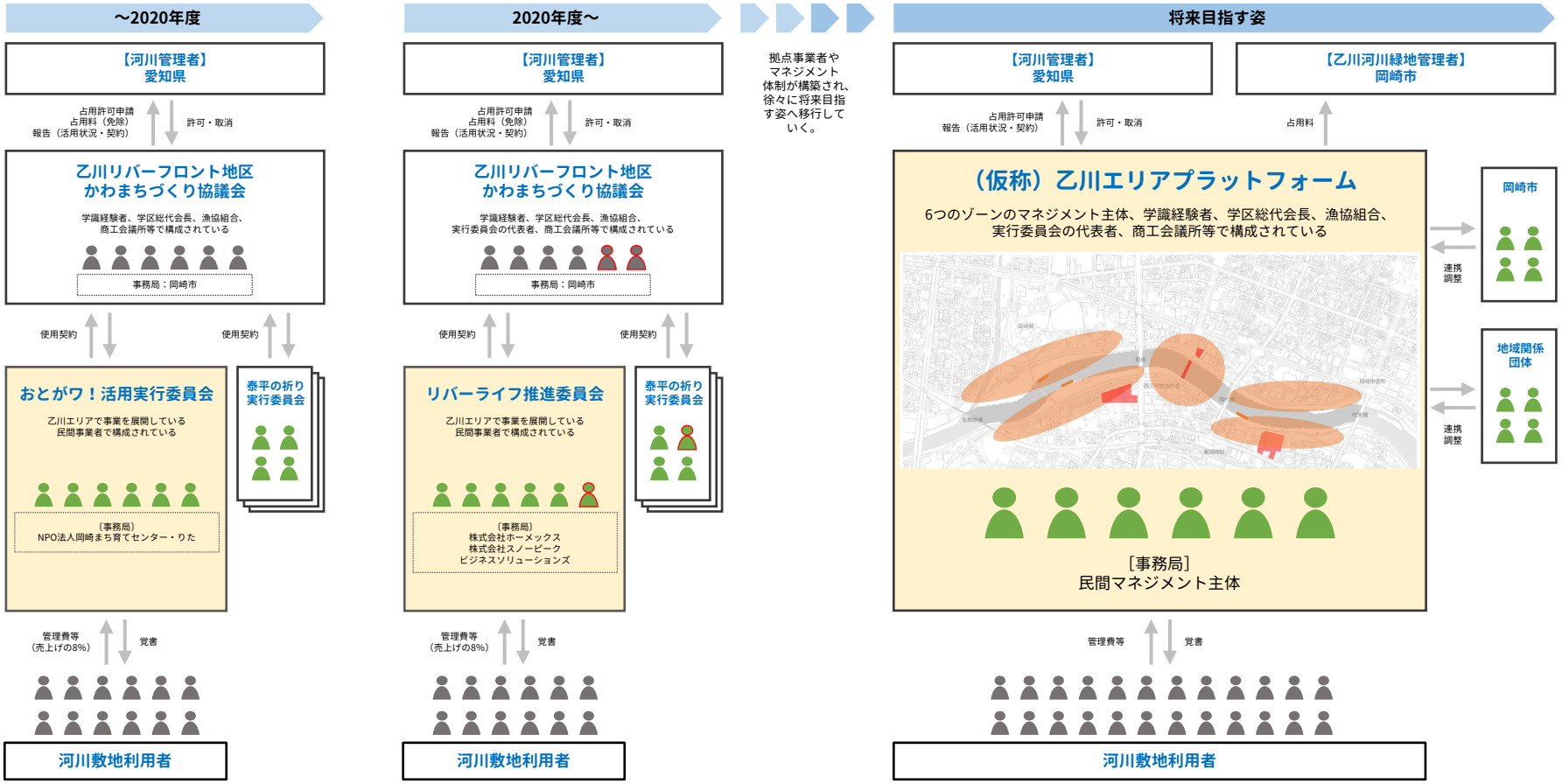
ペデストリアンデッキ
東岡崎駅からオトリバーサイドテラスを結ぶペデストリアンデッキ。乙川・岡崎城方向へ意識が向くようなデザインコントロールがされている。

川沿いの歩行者専用道路
吹矢橋公園前からオトリバーサイドテラス前までの堤防道路は歩行者専用道路になっている。これにより堤外地から川までの連続した空間が実現している。

船着場
ゾーン内に二つある公共整備により実現した船着場。東岡崎駅からのアクセスが良好で、岡崎城たもとの船着場をつなぐ「渡し舟」の運行等がされている。

（1）エリアマネジメント組織の移行ステップ

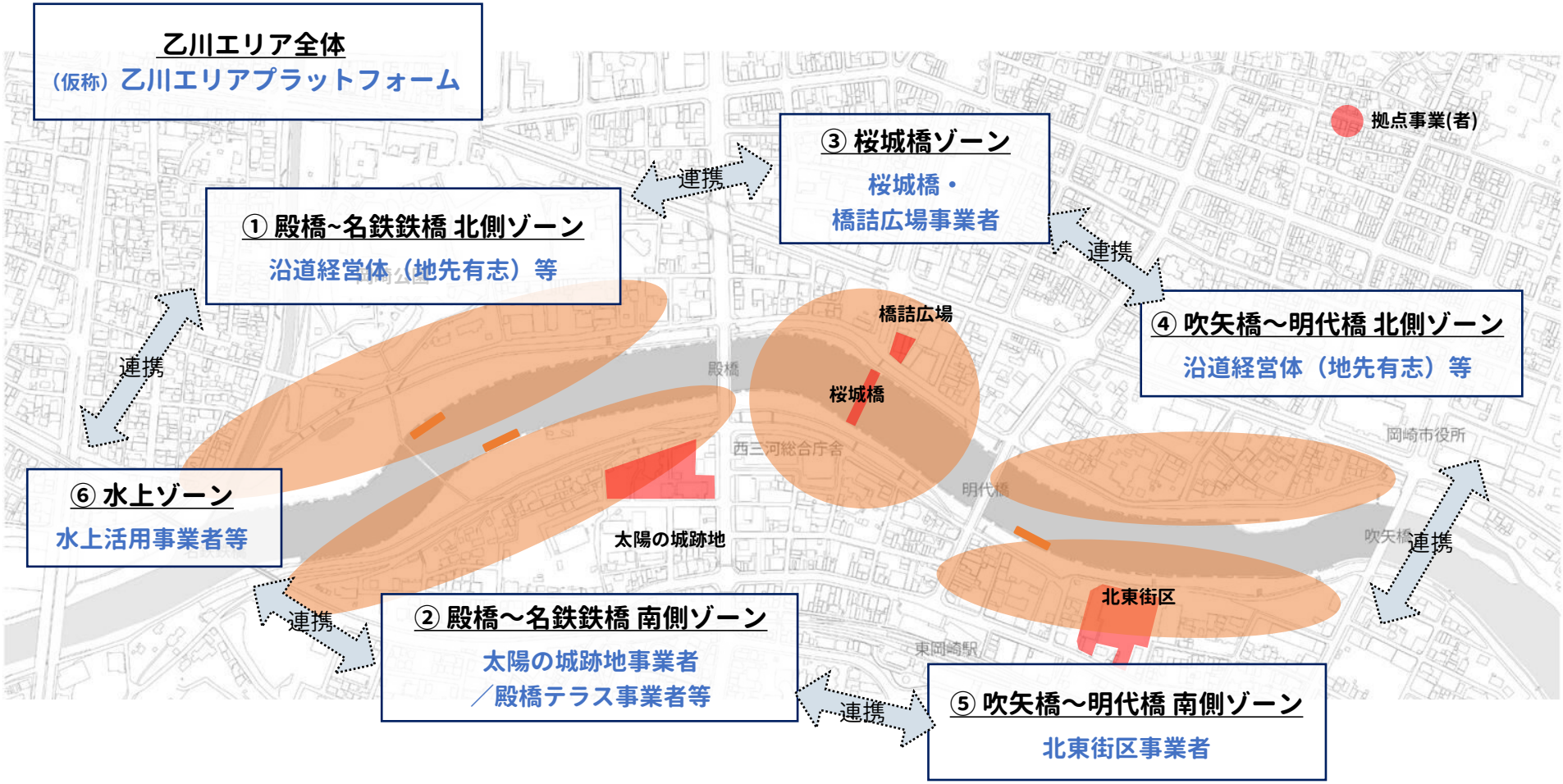
- 現在、乙川リバーフロント地区かわまちづくり協議会（かわまち協議会）が占用主体となっているが、将来的には６ゾーンの主要事業者等で構成される（仮称）乙川エリアプラットフォームが占用主体となり、乙川の活用を推進していく体制を構築していくことを目指していく。
- この体制は、自らリスクを持って投資し回収する事業者が、当事者意識を持ってエリアの利活用と管理運営に責任を持ち、運用ルールやデザインコントロールを推進することで、エリア価値を維持し高めることを意図している。



（2）マネジメントの目指す姿

- 乙川エリアを６つのゾーンに分け、事業者市民となる可能性のある各拠点事業者や、乙川沿いの地権者等による沿道経営体等が主体となり、各ゾーンのマネジメントを行い、それぞれが連携を図ることでエリア全体のマネジメント体制（乙川エリアプラットフォーム）を構築することを目指す。
- 太陽の城跡地、桜城橋等の拠点事業者を公募する際は、各ゾーンのマネジメントに関わる内容を公募の条件等に盛り込む。

※ 事業者市民：責任を持って都市経営の一翼を担い、事業･産業と雇用の創出を通じて地域の稼ぎと税収等の歳入を増やす公共性･公益性及び事業性を兼ね備えた市民。



第４章

乙川エリアで行われるプロジェクト

乙川エリアで実現する拠点プロジェクト

①太陽の城跡地
（PPP活用拠点形成事業）

約8,000㎡の市有地で事業用定期借地権の設定などによりシティーホテル、コンベンション、リバーベースを民間主体で一体的に整備、運営するまちの拠点形成プロジェクト。

②殿橋テラス

乙川の優れた景観と魅力的な水辺を生かした都市空間を創出し、まちとの繋がりを作るために令和２年度に岡崎市が整備。
平成28年度から平成30年度にかけて社会実験を実施し、季節を通して生み出せれる風景や新しい文化を生み出し、かつ世代を超え、多くの方が訪れていただく場所となり、常設に至った。

③桜城橋橋上広場・橋詰広場

公園人道橋の桜城橋橋上広場とその橋詰広場約2,800㎡の公園用地を活用し、Park-PFIによる民間活力を導入し、休憩所、飲食店などを整備、運営するプロジェクト

④北東街区（オトリバーサイドテラス）
（PPP活用拠点形成事業）

名鉄東岡崎駅に隣接する約6,600㎡の事業用定期借地権を設定した市有地で、商業等の都市機能を担う民間事業者主導により、令和元年11月にホテル・レストランなどの複合施設「オトリバーサイドテラス」をオープン。

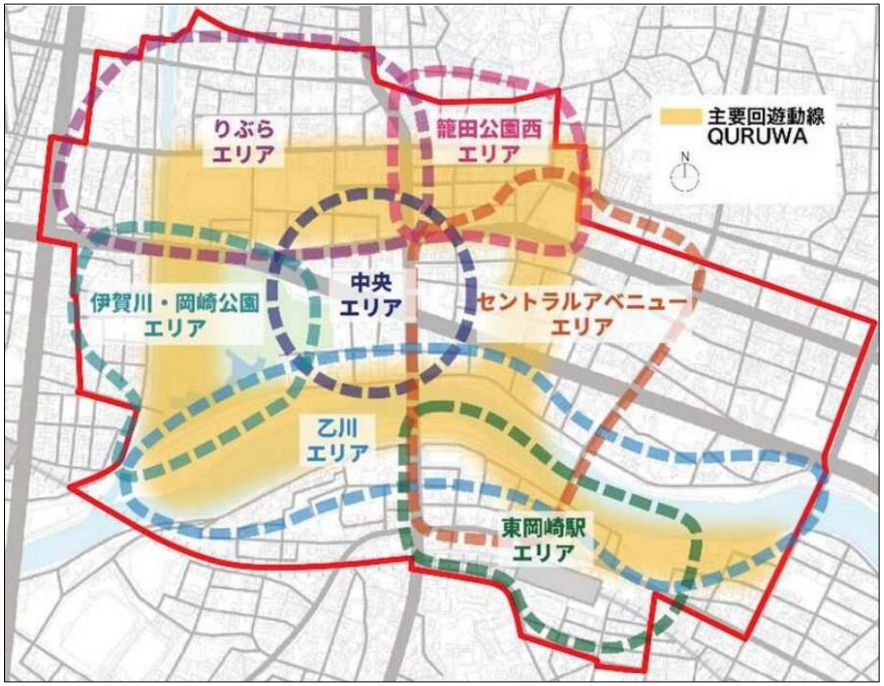
⑤東岡崎駅整備事業

岡崎市の玄関口として広域的な都市機能が集積する都市拠点にふさわしく、交通広場や道路等の公共施設の整備を図るとともに、土地の合理的かつ健全な高度利用により商業・業務施設、広場・バスターミナルの機能導入を図り、にぎわいと交流に資する市街地を形成することを目的とする。

QURUWA戦略の推進（まちづくり推進課）

■プロジェクト概要

- QURUWA戦略とは、QURUWA地区内の豊富な公共空間を活用した公民連携プロジェクトを実施することにより、QURUWAの回遊を実現させ、波及効果として、まちの活性化を図る戦略。
- 戦略に基づき、中心市街地の活性化をはかる中で、まちづくり推進課は戦略推進の担当課として拠点事業者の窓口対応や庁内関係課との各種調整、それらに付随して社会実験実施等の支援やQURUWA戦略を活かした事業の実施や関係者の増加に向けて（リノベーションスクール等）に取り組んでいる。乙川エリアで行われる「かわまちづくり」もQURUWA戦略の中のプロジェクトの一つ。
- 初動期は公共空間活用や公共空間で稼ぐといった動きに比重を置いた事業の進め方をしてきた。最近では新たに自治再生の動き等が動き始めている。



■実施して見えてきた成果

- 新しいトピックとして「自治再生」の動きが見えはじめた。
- QURUWA地区内での新規出店が一年で10店舗の状況が４年間続いている。
- QURUWAに関わる民間（事業者市民）が増えた。
- 最初の２年間は「公共空間活用」や「稼ぐ」というテーマが主だったものだったが、最近ではこれらに加え「働く」「教育」「自治再生」のようなテーマを取り扱う案件が増えている。これらは、活用や稼ぐということから、それをなんのためにやるのかということを考えられるようになった結果と捉えることができる。
- 市民が上手に公共空間を使えるようになってきた。

■実施していく上での課題

①公民連携事業を推進していく職員の育成

- 民間事業者とともに事業を推進していくためには、行政職員もプライベートマインドをもってまちに関わっていくことが必要。全国で実施している行政職員向けの研修プログラム（公民連携プロフェッショナルスクール等）への参加を促しながら職員の育成を図りたい。

②拠点事業者との対話

- 今後、QURUWA地区内において大規模な民間事業が動いていくことが想定されており（東岡崎駅整備事業、太陽の城跡地開発事業等）、これらを推進していく事業者との対話の場が大切となる。これまでの活動やQURUWA戦略が大切にすること（敷地主義ではなくエリア主義、ローカルファースト等）を伝えていくことが重要。

③交通インフラの整備

- ウォーカブルなまちの実現に向け、シェアサイクルやQURUWA地区内の駐車場活用を検討するような社会実験を計画し、車に依存しないまちのあり方や、実現のために必要な交通インフラの整備が必要。

QURUWAの情報発信（まちづくり推進課）

■プロジェクト概要

- QURUWAの情報発信プロジェクトとして「QURUWAお知らせプロジェクト」を推進している。
- お知らせプロジェクトは、QURUWA地区内の様々な情報（イベント開催情報、新規出店情報等）を「QURUWAボード」「QURUWAウェブサイト」「SNS」の３つの媒体を通して発信を行っている。
- 2021年度からは民間事業者とともに、情報発信を推進する体制をとっており、5年計画で民間事業者が自立して進める体制に移行できるよう検討を進めている。
- 2022年2月にQURUWAのウェブサイトをリニューアルし、そこからはウェブサイトを軸にした情報発信を実施している。

→QURUWAウェブサイト：https://quruwa.jp/
→instagram：@quruwa_okazaki

■実施して見えてきた成果

- 令和４年度（2022年度）に入り、アクセス数（PV数）が伸びている。理由としては更新頻度が上がったことや、QURUWA地区内のイベントが増えたことが挙げられる。ウェブサイトにはオーガニック検索（検索エンジンをつかった通常検索）の数が多い（73%）。また週末にビュー数が増えることや男性の新規閲覧者が多いことが分かっている。
- SNS（インスタ）のフォロワーも増えている。（2,000フォロワー）

■実施していく上での課題

①収益化と体制の自立化

- 2022年度から民間事業者とともに５年計画で事業を進めている。最初の3年間は行政も一緒になり事業構築を図り、4年目以降は民間事業者を主とした実行委員会を組成、それらが運営主体となり自立した体制での運営ができるよう検討を行っている。
- 5年目以降の予算措置は難しくなることが予想されるため、そこまでに広報の収益化や企業協賛など収益面の自立化が求められてくる。

②イベント情報以外の情報発信の強化

- 取り扱う情報がQURUWA地区内で行われるイベント情報に偏ってしまっている。本来はエリア内の情報発信による民間企業の投資誘導が目的のため、今後は情報の出し方や編集方法等を検討し、目的達成ための広報戦略を検討していく必要がある。

かわまちづくり支援（まちづくり推進課）

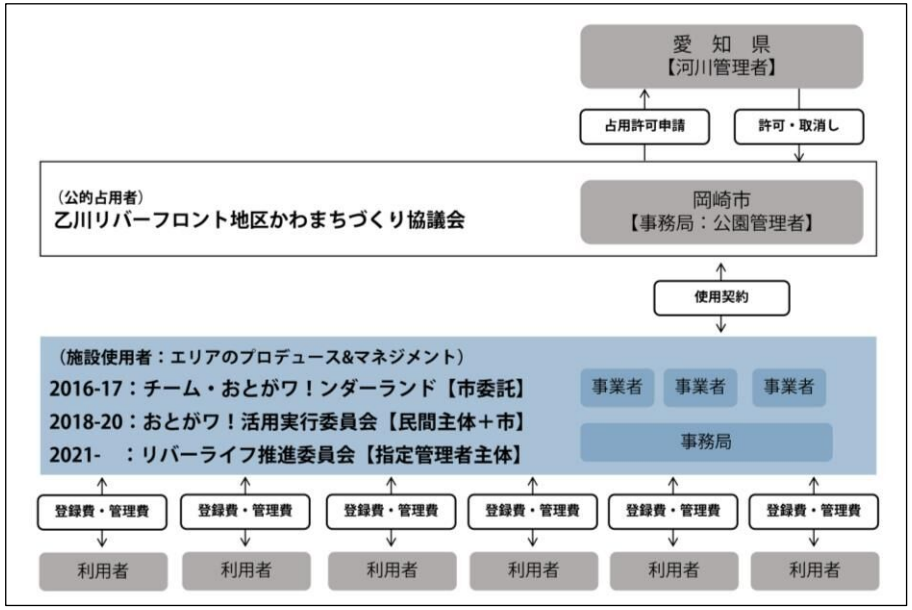
■プロジェクト概要

- QURUWAの中心を流れる乙川河川緑地を対象エリアとし「かわまちづくり支援制度」を活用しながら水辺空間を活かしたまちづくりを平成27年（2015年）から推進している。
- 平成27年3月に岡崎市が「かわまちづくり支援制度」に登録し（愛知県管理河川では初の登録）、同年11月に乙川リバーフロント地区（吹矢橋～名鉄鉄橋までのエリア）が「河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域」に指定されたことにより、対象区域内における民間事業者の営業行為が可能になった。
- これらの仕組みを活用し、平成28年（2016年）から、かわまちづくり社会実験（おとがワ！ンダーランド）を実施、河川活用を実施する団体（2016～2017：チームおとがワ！ンダーランド、2018～2020：おとがワ！活用実行委員会）と使用契約を結ぶことで民間事業者や活動団体による河川活用を推進していった。
- 社会実験は5年間実施し2021年3月末をもって終了して以降は、指定管理者制度を導入し、河川活用を実施する団体（リバーライフ推進委員会）の役割を兼ねることで、これまでと同様のかわまちづくりの推進を行っている。

■プロジェクトの実施状況（担当課としての関わり）

①かわまちづくり協議会の運営

- 公的占用主体である乙川リバーフロント地区かわまちづくり協議会の事務局の役割を担っており、年に２～３回程度の会議を開催し、活動報告や占用申請内容についての審議・協議等を行っている。



②かわまちづくりの推進に関する各種調整

- 令和3年（2021年）から乙川河川緑地に指定管理者制度を導入したことで、これまで別々に実施していた河川と公園上の許可を一体的に手続きを進めることができるようになった。行政は現時点の指定管理者制度では担えない部分を補い、必要に応じて今後の指定管理者の募集条件の見直しを行う。

■実施して見えてきた成果

①河川占用許可期間の延長

- かわまちづくりを実施して７年目にして、河川占用許可期間を10年間に延ばして許可してもらうことができた（現行の法制度では10年が上限）。これは河川管理者に、これまでの活動（行政は許可手続き、民間は活用事業）を認めていただいた証として捉えることもでき、公民連携を進める上でも良い例だといえる。
- 長期的な事業実施の目途が立てることができるという点は民間事業者が投資回収の計画を立てやすくなるという点においてもプラスに働くことが考えられ、今後はより長期的な視点で事業を実施する民間事業者の参入も期待している。

	2016年～2018年	2019年～2021年	2022年～
河川占用許可期間	1年	3年	10年

②かわまちづくりの定着

- 活動を継続してきたことで、河川敷で実施するイベント来場者数が増えた。また、それら伴い、日常的に河川敷を利用する人も増えてことを実感している。ソフト事業による成果はもちろんのこと、河川敷のハード整備（護岸整備や遊歩道の整備）による効果も大きいのではないかと思っている。

■実施していく上での課題

①川で活動するという意味の明確化

- 現在は活動の目的が、それぞれの民間事業者にあり、共通認識としての「川で活動する」事の意味の定義を明確に定めて定着させるため「おとがわエリアビジョン」を活用して発信する必要がある。その際には公園管理者等との連携が必要である。
- 川で活動する事の意味を体現するような川の使い方や風景を少しずつ増やしていく必要がある。
- 今後のかわまちづくりの指針となるような使い方を見せていくようなプロジェクトを新たに立ち上げることも良いと思っている。ただイベント等を実施するだけではなく、生み出された状況に対しに関係者間で協議する場を設け、イベント集客だけでない、新たな評価指標を見出していくことが必要である。

②他エリアとの連携

- これまでの継続的な活動により河川活用は充実したが、かわまちづくりの本来の目的である「川とまちの融合」という点においては、まだまだ課題がある。今後は周辺の地先空間の利用や地元町内会との連携を強化することで、川とまちが一体的な利用を目指していく必要がある。

③公園利用ルールの定着

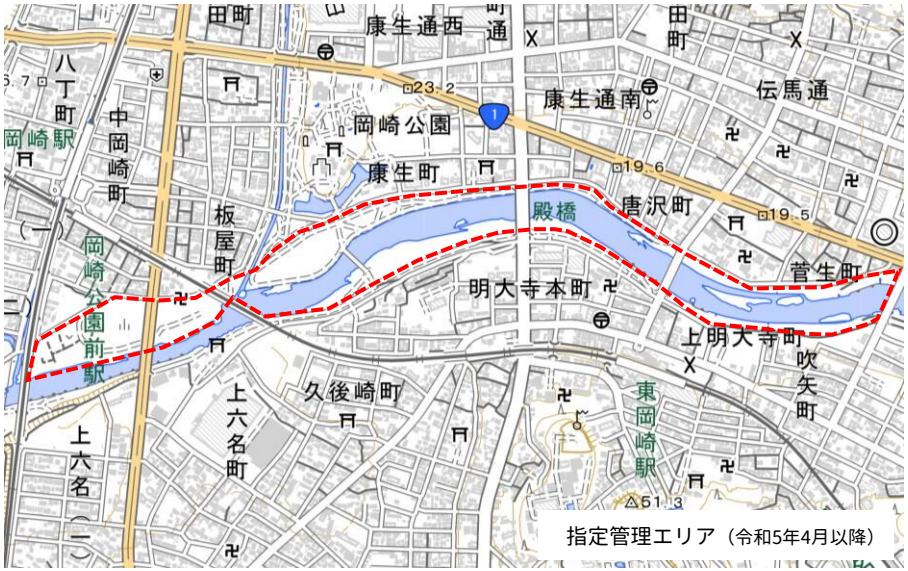
- 社会実験実施により得た、水上利用、火気利用、宿泊行為、音出し行為等にあたっての注意事項やノウハウを全体に広めていく必要がある。

指定管理業務の監督（公園緑地課）

■プロジェクト概要

- 安全安心かつ安定的な公園運営を実現し、周辺へ効果的・効率的に波及させるため、あらゆる面における質の向上と、公園施設の有効利用並びに経費縮減を図るとともに、周辺とまちとの連携によりQURUWA戦略の具現化による暮らしの質の向上、エリアの価値の向上を期待し、令和3年（2021年）4月から乙川河川緑地（殿橋下流左岸：約25,000㎡）を対象に指定管理制度を導入した。事業者募集を実施し、「ホーメックス株式会社・株式会社スノーピークビジネスソリューションズ共同企業体」が選定された。

  ※乙川河川緑地以外では、岡崎公園、奥殿陣屋、南公園、籠田公園の市内の５つの公園が指定管理になっている。
- 公園緑地課はこれら業務の進捗を把握するとともに、適正な管理が実施されているかを監督する立場でプロジェクトに関わっている。
- 現在は殿橋下流左岸のみでの実施となるが、令和5年（2023年）4月以降は、指定管理エリアを乙川河川緑地一帯に広げ、管理におけるさらなる効率化を図ろうとしている。



指定管理エリア（令和5年4月以降）

■指定管理者にお願いしている業務内容

- ①施設の運営に関する業務（施設管理・受付・施設の利用承認等）
  ②施設及び設備等の維持管理に関する業務
  （施設・設備・植栽等の保守管理業務、清掃業務、増水時対応等）
  ③提案事業及び自主事業の実施
  ※提案事業として年間で60日間の事業（イベント等）実施が課せられている。
  ④その他業務

■実施して見えてきた成果

①大型イベントが増えて来場する人が増えた。

■実施していく上での課題

①他エリアへの滲み出し

- 岡崎公園や観光協会との連携を考え、チラシを相互に置き合ったり、イベント時期を調整している。
- デザイン会議でイベント会場の望ましいレイアウトについて話し合ったこともあるが実現していない。トライは試みるものの、事業者にとってのメリットが弱く継続していかない。
- イベントの内容を川に関連したりそこから滲み出しが起きるものにしておく。など、優先すべきことがとにかく人を集めることなのか、川に関わるコンテンツなのか、滲み出しなのか、もとめる成果をはっきりさせる必要があり、それを今後考えていくことが課題。

QURUWAイベントの企画（公園緑地課）

■プロジェクト概要

①QURUWAと暮らす

- QURUWAエリア内の公共空間を活用し、QURUWAの回遊性向上を目的としたイベントを実施。初回は中央緑道のお披露目を兼ねて。以降は地域のプレイヤーが中心になり実施している。

②おとがわびより

- 毎年、秋頃に実施している。秋まつりやジャズストリート等と同時に開催し、回遊性を向上し、エリアを一体的に見せるのが目的。

■実施していく上での課題

①イベント実施の目標が不確定

- QURUWAイベントの目標設定が弱く、さらにその先のKPIが成熟していないと感じている。QURUWA戦略の目標からイベント自体ガイドライン等が必要と感じている。

②他エリアへの滲みだし

- イベント等を実施するエリアだけでなく、岡崎市全体に豊かさが波及していくような具体策を見出す必要がある。QURUWA地区近郊に住む方だけでなく、上流部とのつながりをPRすること等により、郊外や他地域で暮らす方にどのような効果が出るのかを起点にして、企画を考えていく必要がある。

プロジェクトの今後の展望

イベント実施を通して、岡崎市全体に豊かさを波及する

- 計画と実態をすり合わせて、QURUWAに暮らす人たちだけでなく、それが岡崎市全体に波及していくのということを示していきたい。乙川だと、森を健全にすることで流域が守られるというのはストーリとして分かりやすい。

教育的な視点をイベントに盛り込む

- 教育の場にも入っていきたい。来てもらうためには、子どもたちに行きたいと思っていもらえることが大事。近隣の学校や園児を対象にQURUWAで行われていることを伝えていくことが、QURUWAエリア内だけでなく、岡崎市全体に波及していくきっかけになるのではないかと考えている。

QURUWAの魅力を生み出すプラットフォームづくりの必要性

- QURUWAの魅力を捉えなおし、QURUWAイベントとして推進していく一つの会議体が必要ではないかと思っている。事業者だけでなく行政もそこに加わり議論し、計画と実地をあわせていく。そんなプラットフォームが必要ではないかと思っている。また、現在のエリアビジョンはマネジメント体制が各拠点がやることになっているが現況に合わせて見直しの必要性があると感じている。各事業者との話しあいの場が必要ではないか。

景観まちづくりの推進（まちづくり推進課）

■プロジェクト概要（これまでの検討経緯）

年	内容
2017年～	市内のまちづくりNPOと協働し、景観形成業務を開始 ※建物の高さや立地、岡崎城がどこから見えるかなどの現状調査を行う。
2019年～	まちづくりデザインアドバイザーとして藤村龍至氏を招聘し、アドバイスをいただきながら岡崎市側の意図を整理したガイドラインを作成する。
2020年	「景観ガイドライン」の素案を作成（公表はしていない）
2021年～	ガイドラインに市民の声を反映すべく、市民アンケートを実施した。また、7町広域連合や次世代の会と連携し、景観分科会を立ち上げ、話し合いの場を設ける。
2022年～	景観分科会に参加しているメンバーや土地オーナーにたいして、広告、色彩、緑化、建物の低層部、高さ、夜間景観という６項目についてアンケートを実施。アンケート結果をもとに、市民との議論の場を展開中。

■実施していく上での課題

- ワークショップ等で、基準、ガイドライン、模範事例等を議論しながら、今後の検討に何が必要なのかを考えたい。対象地としては中央緑道でまずは実施する。その後、他エリア（乙川、中央緑道、籠田公園等）にも展開し、一体的な景観づくりを目指す。
- 地区指定も必要であれば景観地区の指定もしていく。ただ基準なのか規範なのかどちらが必要なのかをWSで議論していきたい。
- デザイン会議の下のデザインレビューという形で民間と専門家が議論する場をつくりたい。乙川河川敷や中央緑道に面したの民間空間も含めた景観を今後もよくしていきたい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
景観を議論するための規範づくり
3年以内には規範の見定め、基準の見定め、そして啓蒙を行い、地域側との合意形成を図っていきたい。2030年以降は岡崎の人口が減少に転ずるので、そこまでがマンション建設のピークだと考え、そこまでに規範をつくっていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
実務的な調整が図れる場（デザインレビュー）の実現
実務的な調整が図れる場をつくっていきたい。建物ができるときには条例と法に基づく届け出によるわけだが、岡崎市はすでに市全域の規範はあるが、QURUWAエリア（乙川沿川地域）については今議論しているところ。広域で見たときに、その敷地をどうするか等を考えていく必要がある。それを調整するために民地についても行政、事業者、専門家（可能なら設計者）で議論するデザインレビューの場をつくっていきたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
市民が自ら景観を考えられる状態の実現
現在行っている議論の結果、立ち上がってきたものを、もう一度議論する時期。公共空間と隣り合う自分の空間をいかに使うかを民間が自主的に考えられるような状態になるといい。

交通の社会実験の実施（企画課・デジタル推進課）

■プロジェクト概要

- 岡崎市は2030年にあるべき姿を描くことを目的に、令和2年8月に「SDGsの未来都市計画」を策定している。
  https://www.city.okazaki.lg.jp/1300/1303/1325/p027187_d/fil/SDGsmiraitoshikeikaku.pdf
- これら計画の3つの柱のうちの1つが「公民連携して、ソフト・ハード両面の投資が緩やかに持続するまち」であり、その主たる対象エリアはQURUWAとなっている。
- とくにその中でも重要なエリアとして乙川エリアを考えている。計画自体の目的は、岡崎市を持続可能にしていくことであり、以下の3つが大きな項目として掲げられている。
  ①公民連携してソフト･ハード両面の投資が緩やかに持続するまち
  ②３世代同居・近居が進む地元に愛されるまち
  ③河川の水源でもある森林を守り育てるまち
- 民間事業者と連携したシェアリングモビリティの普及に対する具体的な言及も計画の中でされており、これら計画を背景に市内でも民間事業者と連携した社会実験が行われている。

■次世代モビリティの活用に関する実証実験

- まちなか脱炭素及び渋滞緩和に向け、公共交通機関で岡崎公園へ訪れる方の移動手段として、次世代モビリティを活用した実証実験を実施した。

【C＋WALK（シーウォーク）、電動自転車・電動キックボード】

- 11/23～2/12 の期間で実施実施（土日祝のみ。10時～17時）
- 東岡崎から岡崎公園への交通を検討。オトリバーサイドテラスの船着き場付近と岡崎公園にポート置き利用者ニーズ等を検証する社会実験。スマートコミュニティ推進協議会（先進技術を地方都市に実装していく協議会）と一緒にやっている。
- また、同時期（11/23～12/25）に電動自転車・電動キックボードの実証実験も実施した。これは、岡崎市が包括連携協定に基づき、大成建設と実施した事業であり、新技術の検証を目的に実施した。
- 企画課としては民間から出てくるさまざまな相談の実施できる場所として乙川河川敷（道路交通法の影響を受けにくい）を紹介し、将来的には、道路でもやっていけるようにすることでQURUWAを回遊させたい。

各種イベントの実施（観光推進課・商工労政課）

■桜まつり

- 毎年3月末～4月上旬にかけて岡崎公園及び乙川河川緑地一体で行われるお祭り。63年前から実施しており、桜を植えた時期は定かではないが同時期からの行事であり、桜とともに育ってきた事業。
- 岡崎市は明代橋から伊賀川までの河川敷及び堤防道路沿いをライトアップしている。乙川河川敷（右岸）や岡崎公園内には露店出店エリアを設けている。露店エリアはコロナを契機にこれまで課題となっていた通路幅（お店同士の間隔）などを整理するとともに出店者数を絞り、歩きやすい空間とした。
- 近年、桜の木にライトをつけていたものをLEDに変更した。こちらは省エネの観点から実施。（ただこれまでの電球の在庫もあるしコストもあるので岡崎公園内から少しづつ変える予定）
- 令和2年度（2020年度）は新型コロナウイルスの影響により、規模を縮小（露店出店中止、夜間照明のみ実施）して実施した。

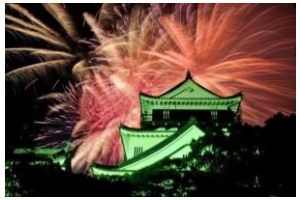
年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
来場者数	60万人	58万人	2.8万人	20.4万人	25.8万人

■岡崎城下家康公夏まつり花火大会

- 2020～2021年は新型コロナの影響により中止。それ以前は、毎回8～10万人程の来場者だったが、2022年は3万人まで落ち着いた。

年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
来場者数	48万人	48万人	中止	中止	3万人

- 多くの方にご来場いただけることは嬉しいことだが、まちなかに一度に人が集まることによって交通規制も実施する必要があり交通は麻痺する。事故が起きてもおかしくないほどに駅に人が集まってしまうことや、ゴミ問題など多くの課題を抱えていた。コロナ後の再開に合わせて、課題を解決するべく運営の改善を行った。
- 今後は、花火大会の全体コーディネート（中心部は5万人くらいの規模が安全に実施できる規模かと思っている）をコンペで募るなどして民間事業者とうまく連携していきながら実施してきたい。また、地元のお店も花火の日に店先をひらくなどして上手に花火大会の日に商売をやっていってくれると良いと思っている。



変更点①：桟敷席の中止
以前より行政協議が難航していたことや、建築コストがかかりすぎる等の課題を抱えており、2022年度からは桟敷席の設置は終了した。それに代わって、河川敷スペースに有料観覧エリアを設置した。

変更点②：無料観覧スペース（殿橋下流側）の見直し
有料観覧エリアを設けるにあたって、これまで無料観覧スペースとなっていた殿橋下流エリアの運用を廃止した。こちらは近隣から批判的な声も多く、今後の方針は検討が必要。

変更点③：民間企業との連携
観覧席の一部の運用を民間事業者（2022年度はスノーピークビジネスソリューションズ）に委託。これにより楽しみ方のバリエーションを増やすことができるとともに市の負担を軽減することができた。

変更点④：youtube配信の実施
花火大会の様子をYoutube配信し、会場から離れたところでも花火を楽しんでいただけるようにした（2022年度はリアルタイムで30万回視聴を記録）。今後がパブリックビューイング等を設置した、サテライト会場を用意し、狭い場所に多くの人が集まるのではなく、もう少し広域で花火を楽しめるような環境をつくっていきたい。

■岡崎城下家康公秋まつり

- 毎年11月上旬に乙川河川緑地と岡崎公園多目的広場を会場に「秋まつり・商工フェア」を開催している。実行委員会形式での実施。青経連、FMラジオと実行委員会を組み、事務局を岡崎市が担っている。
- 1978年～19981年は「岡崎まつり」として開催。その後1988年以降は「秋の市民祭り」として開催。2016年からは市内のみならず、市外からの来客も見据えて名称を「岡崎城下家康公秋まつり」と変更して開催している。
- 事業者振興が主な目的だが、岡崎の三大祭りとして、人々が集う事とそこで市内のお店と出会う事も目的として考えている。
- 商工まつり、農林業祭に加えて今年は、大河ドラマで来たお客様にお店のファンになってもらいたいという目的で、新しい事業者さんにも出店してもらった。

年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
来場者数	11万人／2日	12.5万人／2日	中止	1万人／2日	5万人／2日

【実施して見えてきた成果】
- 事業者支援としてはコロナの影響がすごく大きかったので、昨年はコロナへの支援という意味で実施。2022年はだいぶイベントらしくなって、コロナからの復活を感じさせるものになったのではないかと思っている。コロナ前に戻り切ってはいないが、2021年に比べて1,7倍の売り上げ。出店者も増えている。

【実施する上での課題】
- これまでは大きいテントだったがトラックステージを実施。本当はもっと大きなステージにしたいし、たくさんの出店者に出てほしいがコロナとどう共生しながら開催するかが課題。
- 準備時の草刈りや、搬入出の方のトラックのスピードなど住民からご意見をいただくことが増え、近隣の方への配慮をする必要がある。

■その他、観光誘致を目的としたイベントの実施
①岡崎城下家康公夏祭り
- 実行委員会形式で実施している。毎年7～8月の時期に実施。

②グルメフェス
- 多目的広場を会場に毎年11月頃に実施するグルメイベント。コロナ影響で直近2年は開催を中止している。
- イベントは岡崎公園の指定管理者が実施、今後はQURUWA戦略との連携も強化していけるよう呼びかけをしていきたい。

■三菱カーフェスティバル

- 2022年4月から実施している。11月にも実施予定。「くるまつり」から名称を変えて現在に至る。今後も年２回乙川で実施を予定。
- 岡崎のものづくりの中心である自動車産業を市民の方に知っていただくのが目的。車両展示、４WD登坂キット、試乗会（岡崎市内を走る）などの実施。公民連携企画として実施。

【実施して見えてきた成果】

- 想定以上の集客があった。特に遠方からの集客があった。
- 遠方から乙川に訪れるきっかけづくりにはなったのではないか。登坂キットの体験も人気で早々に整理券はなくなった。次回は5000人～7000人を目標としている。

■その他の公民連携企画

- イオンモール岡崎と2020年に「地域活性化に関する包括連携協定」を締結。場所を無償で提供いただき、その中で市のイベントとして展示やワークショップの実施を予定している。
- 昨年はSDGsをテーマにしたイベントを2回実施。イオンにくるお客さまに見てもらえる機会になるし、イオン側も市と何かやりたいという要望もあったので両方の意図が合致した。
- 2020年から金融機関９行とも連携協定をして情報交換やセミナーなども行っている。
- Chaooと連携協定を締結し、どうする家康放映の関係で、西三河地域に岡崎の魅力を発信し、岡崎市の施策をお店の方に伝えている。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

岡崎の人と連携しながら、外から人を呼んでくる

プロジェクト名：ソウルフードジャム
実施団体名：リバーライフ推進委員会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2021年～（2年目）

■事業概要
指定管理者が実施する世界のソウルフードを美味しく楽しくスタイリッシュに食べられるグルメイベント。
2017年アウトドア＆ライフスタイルフェスタ「フィールドスタイル」の中から誕生、乙川河川敷では2021年から単独開催され、毎回30店舗以上のフードトラックが出店、SUP体験や子ども向けアクティビティ体験も行なっている。2022年から「肉三昧」や「旨辛祭」など、テーマに沿った特別企画も展開している。

■ソウルフードジャムとは？
アウトドア＆ライフスタイルフェスタ「フィールドスタイル」から誕生したフードイベント。2021年からは指定管理者が実施する事業の一つとして乙川河川敷で開催（以下の表参照）。乙川以外にも鶴舞公園（名古屋市）、富士中央公園（富士市）など、各地で開催している。

	2021年4月	2021年8月	2022年5月	2022年10月	2022年12月
タイトル	SOUL FOOD JAM vol.9	SOUL FOOD JAM 旨辛祭	SOUL FOOD JAM vol.15	SOUL FOOD JAM 旨辛祭	SOUL FOOD JAM 肉三昧
開催期間	2日間	2日間	3日間	2日間	2日間
来場者数	7,500人	7,500人	9,000人	12,000人	14,000人

■プロジェクトの目的
市民に楽しんでもらうことはもちろんだが、外からも人を呼びこめるような、岡崎に来る目的になるようなイベントになることを目的としている。そのために、乙川のロケーションを活かし、見た目やクオリティにこだわり、全国のおしゃれなお店をスタイリッシュに楽しめるような企画づくりを行っている。

■実施していく上での課題
増水対策
プログラムを実施する上で一番の課題は川の水位、中止にすると収支にマイナスが出るが、設営して、水位が上がってきたときに撤去できないといけないので中止にせざるを得ない。

駐車場の不足
もっと大きなイベントにしようと思うと、もう少し駐車場が確保できないと難しい。車のトラブルなどで地域の人に迷惑をかけてはいけない。近隣店舗の駐車場と連携することができたら良いのではないかと思う。

マネジメント体制の検討
誰が仕切っているか分かりにくい状態になってしまっているので、マネジメント体制を新たに作り、やる気のある市民とノウハウを持っている企業が連携すると良いのではないかと感じている。

■実施して見えてきた成果
出店者との関係性
実行委員会に主導権を保ちつつも、参加してくれた出店者には参加するメリットを十分に感じてもらえるような運営ができている。

プロジェクトの今後の展望
「肉三昧」や「旨辛祭」などテーマ性を持ったやり方を、岡崎でも開拓したい。岡崎市民にも評価してもらえて、喜んでもらえている。次のステップとしては、対岸で地元の人が実施する企画との連携を考えている。

①短期目標（5年後にありたい姿）
地域との共同開催
地域の方にソウルフードの場を使ってもらい、共催もしていきたい。ソウルフードの開催時間を伸ばし、夜も実施したらいい空間だったので、定着させていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
後継者が育っている
若い世代のオーガナイザーが地元から出て、ノウハウを真似して、食べていける人が出てくると良い。地元のことを誇りに思って、この事業で生活できる若い人が育ってくることが大事だと思う。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

新たなビジネスモデルを作り、多くの人を乙川に連れてくる

プロジェクト名：アウトバックガレージマーケット
実施団体名：リバーライフ推進委員会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン・北側ゾーン
プロジェクト開始年：2021年～（2年目）

■事業概要
指定管理者が実施するアウトドア用品を中心に遊び道具や日用品など200以上が出店するフリーマーケット。キャンプ用品、アウトドア用品、スポーツ用品、クルマ＆バイクパーツ（周辺用品）、古着、雑貨、家具、DIY用品（ハンドメイド作品含む）など、ここでしか手に入らないこだわりの一品が店頭に並ぶ。イベント会場横では「ソウルフードジャム」と連携した飲食ブースや、レジャーシート持参で楽しめるピクニックエリアなどが併設されている。

■プロジェクトの実施状況

- アウトドア用品を中心に遊び道具や日用品を集めた個人の方もプロの方も気軽に参加できるフリーマーケット。誰もが気軽に出店できるように出店料をおさえ、来場者の入場料で収益を得るビジネスモデルを検証する目的で2021年から実施している。
- これまでに2度開催しており、vol.1からvol.2にかけて、出店者数・来場者数ともに増加していることから、イベントの人気が分かる。

	2021年10月	2022年6月
タイトル	OUTBACK GARAGE MARKET vol.1	OUTBACK GARAGE MARKET vol.2
開催期間	2日間	2日間
出店者数	135店舗	250店舗
来場者数	4,000人	7,500人
入場料	1,000円／日	1,000円／日

■出品品目

アウトドア用品を中心に遊び道具や日用品までが出店可能
・キャンプ用品、アウトドア用品、スポーツ用品、
・クルマ＆バイクパーツ（周辺用品）
・古着、雑貨、家具、DIY用品（ハンドメイド作品含む）

■出店料／ブースサイズ

個人：3,300円～／ブースサイズ 3m×8.5m
業者：16,000円／ブースサイズ 6m× 6m

■フードエリア／ピクニックエリア

入場ゲートの外には、ソウルフードジャムと連携したフードエリアや、ポップアップテントやピクニックシートを持参して過ごすピクニックエリアが設けられている。

■実施して見えてきた成果

新しいビジネスモデルを確立できた。

- 出店料安くし、一般の公募を半数以上にしている。出店料の収入が少ない分を、入場料で稼ぐというビジネスモデルを確立できた。また、乙川河川敷の収容能力の可能性と上限を把握することができた。
- アウトバックガレージマーケットは、競合するイベントが少ないためか市外・県外からの来場が多くある。良質な出店者の選定は簡単ではないため、他社には真似ができないくらいのものを作ることができた。日本全国に向けたコンテンツが乙川から作れたと感じており、これらは最大の成果と感じている。

■実施していく上での課題

駐車場の不足

- アウトバックバックガレージマーケットは県外からの来場者も多く、駐車場が足りていない。人気のある出店者にも出店してほしいが、来場者が増えた時の駐車場が足りなくなるので難しいと感じている。今後は近隣店舗の駐車場と連携出来たら良い。
- ラリージャパンを見学しに行ったときに、ラリージャパンは公共交通機関を利用するようアナウンスが徹底されており、来場者に対して駐車場が足りない課題を解決しており感心した。参考にしたい。

プロジェクトの今後の展望

短期目標（5年後にありたい姿）

新たなアウトドア人材を獲得していきたい。

これまで活動していく中で、さまざまなアウトドア人材と出会うことができた。アウトバックガレージマーケットが今後も、そういう人を発掘しながら育てていくような場所になると良い。またそれらからアウトドア文化の醸成をはかっていきたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

スポーツツーリズムをきっかけにまちに訪れる人を増やす

プロジェクト名：フィールドディスカバリーゲーム
実施団体名：リバーライフ推進委員会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2021年～（2年目）

■事業概要
指定管理者が実施する地域に眠る歴史・文化遺産に設定された「ディスカバリースポット」を、配られた地図とスマホアプリをもとに巡り、制限時間内に得られたスコアの合計点で順位を競うイベント。専用スマホアプリを使う「eスポーツ」としての面白さと、地域の史跡を巡ることで、知的好奇心を満たしてくれる「アカデミック」な側面が魅力。指定されたスポットをめぐりオリジナルカードを集めるミッションもあり子どもから大人まで体力にあわせて楽しむことができる。

■フィールドディスカバリーゲームとは？

- 配られた地図をもとに、歴史・文化遺跡等に設定されたディカバリースポットを徒歩またはランニングで巡り、専用スマホアプリを使ってチェックイン（写真撮影）して、制限時間内に得られたスコア（点数）を競う「アウトドア・ナビゲーション・eスポーツ」。体力に合わせて手軽に楽しむことができ、未就学児から参加可能。ファミリー層からアスリートまで幅広く楽しむことができる。
- 岡崎市では指定管理者制度導入をきっかけに2022年から実施。岡崎以外にも全国各地での実施実績がある。

【岡崎での実施実績（2022年12月時点）】

実施年	開催日	会場	エントリー数
2022年	2月20日（日）	乙川河川敷	280人
	11月27日（日）	籠田公園	161人

■スマホアプリ「FIELD DISCOVERY」
ゲーム感覚で、ディスカバリースポットの発見・登録・チェックインを楽しむことができる。フィールドディスカバリーゲームの時には、採点・集計システムと連動して使用する。

■フィールドディスカバリーカード
指定されたスポットにチェックインするともらえるオリジナルトレカ。史跡が描かれた「スポットカード」とお宝が描かれた「トレージャーカード」がある。

■フィールドディスカバリー協会公認キュレーター
フィールドに眠る歴史・文化遺産を自分の足で巡りながら、探索・発見・探究し、それを「ディスカバリースポット」として、スマホ専用アプリ「FIELD DISCOVERY」に登録することで後世に残していく使命を持つ、フィールドディスカバリー協会が認定する「学芸員」。フィールドディスカバリー協会の決められた養成講座を受講し、実地研修を修了することで資格を得ることができる。

■実施して見えてきた成果
スポーツと文化の両方から楽しめるコンテンツの確立
運営はエントリーフィーと企業協賛で実施できた。協賛は年間の協賛金と、物品での企業協賛を募っている。スポーツと文化（アカデミック）の両方から楽しめるものになっていると思う。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
日常的にアプリを使いまちを楽しんでいる

- フィールドディスカバリーゲームは、岡崎のような「歴史や文化遺産」のあるまちのために考えた企画。大会が終わった後もアプリを使って岡崎に来る人を増やしたい。そのために、現在、日常的に散歩や週末利用してもらえるようなアプリ開発を進めている。
- 全国に広めて、まちへ遊びに行った時に、ミッションを出し、リアルなお店に行くとカードがもらえるなど、まちに訪れるきっかけになるようなものにしたいと考えている。5年後よりももっと早い段階で、他市町村へ売りだしていく予定。

②中期目標（10年後にありたい姿）
世界中の人がFDGで各地を楽しんでいる
ディールドディスカバリーゲームを世界的にできるスポーツとして浸透させていきたい。アドベンチャーとアメージングを味わうことができるゲームにして、海外の人に岡崎に来てそれを使って楽しんでもらいたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

川であそび、川にまなび、川とあそぶ

プロジェクト名：川びらき、川あそび、川ぐらし
実施団体名：ONE RIVER
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2019年～（4年目）

■事業概要
ONE RIVERが実施する自主事業（イベント）の一つ。川の１年のはじまりという意味で安全祈願や乙川で行われるプログラム紹介を行う「川びらき（４月）」、子どもたちが夏休み期間に合わせて川での思い出作りと安全啓発を目的で実施する「川あそび（7月）」、上下流連携をテーマに乙川の上流部である額田と連携し川の恵みを五感で味わう「川ぐらし（10月）」という３つのイベントを通年で実施している。

■プロジェクトの実施状況
2019年4月の事業開始から現在に至るまで9回（11日間）のイベントを実施している。2020年以降は悪天候や新型コロナウイルスによる影響で中止としたこともあったが、徐々にイベント認知を高めていき、今年度は一年で約7,200人の方の来場者を記録した。

	2019年	2020年	2021年	2022年
実施主体	おとがワ！活用実行委員会		ONE RIVER	
川びらき	1,500人／1日間	中止	中止	1,000人／1日間
川あそび	500人／1日間	中止	1,500人／1日間	2,500人／1日間
川ぐらし	500人／1日間	4,000人／1日間	5,500人／2日間	3,700人／2日間

■実施して見えてきた成果
関係者間でのコンセプト（大切にしたいこと）の共有化
実施回数を重ねることで、ONE RIVERメンバーや出店者の間で、川とともにある暮らしの豊かさや乙川の心地よさを共有価値として繋げていくことができた

ONE RIVERコンテンツの確立とコンセプト強化
2022ONE年度以降は、イベント内でプログラム実施者を集めるだけでなく、ONE RIVERとしても体験型コンテンツ（川びらき：トークイベント、川あそび：縁日、川ぐらし：体験クイズラリー等）を実施することで、それぞれのイベントのコンセプト強化につながった。

■実施する上での課題
イベントコンセプトの発信と認知向上
３つのイベントを通じて伝えたいのは「川とともにある暮らしの豊かさ」や「自然とともに生きることの大切さ」それらをいかに伝えていくかという工夫は今後も継続して試行錯誤する必要がある。
また、それぞれが持つテーマももっと分かりやすく伝え、３回を楽しみに来ていただけるようにすることや、そのために必要な告知方法やコンテンツのブラッシュアップを図っていく必要がある。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
乙川の啓発イベントとして定着
コンテンツの精度を高め、乙川河川敷の使い方もより洗練されたものにしていくことでイベントを定着化し、多くの方に来場いただけるようなイベントに育てていきたい。
また、イベントのコンセプトや「川とともにある暮らし」のヒントが分かるような発行物を検討し、イベントに来た人はもちろん、そうでない人にも何か乙川のことを知り行動できるようなものにしていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
川びらき・川あそび・川ぐらしのコンセプトの強化
事業を継続することで、それぞれのコンセプトを強化し、乙川の場所の価値、上下流とのつながり、川の安全対策などについてもっと学び、人とつながり、それを楽しみながら発信していたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
イベントがなくてもあたりまえにみんなが乙川を大切にしている
啓発イベントがなくても、日々の暮らしや学校や家庭での生活の中で、みんなが乙川の恩恵を受けて暮らしていることを知り大切にしている社会になっていてほしい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

キャンプをきっかけに、川やまちを好きになる。

プロジェクト名：Let it Camp
実施団体名：ONE RIVER
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2019年～（4年目）

■事業概要
「キャンプデビューは乙川で」を合言葉に2019年から実施している週末限定のまちなかキャンプ企画。まちの中心部にありアクセスが良いこと。忘れ物や緊急時にもすぐに対応ができること。コンビニやスーパーが徒歩圏にあること。キャンプ場を拠点にまち散策が楽しめること。など、まちなか立地という特性を生かし、この場所だからこそできる楽しみ方をキャンプ事業を通して探る取組み。5月～7月末、9月～1月末までの2シーズンに分けて通年で事業を実施している。

■プロジェクトの実施状況
2022年度シーズンで4年目。2022年からは新たにファミリーサイトが追加され、レギュラー（14区画）、プレミアム（5区画）、ファミリー（10区画）の最大3エリア（全29区画）で実施している。事業を開始し2年目（2020）以降はコロナ影響を受け、思うように事業が実施できない日が続いたが、それでも少しずつ取組みが認知されていき、2年目の秋シーズン以降は、ほぼ満席に近い形での営業ができるになった。2022年シーズンからはコロナの影響を受けることなく通年での営業が実施可能となり、4年目からはスタッフへの謝礼の支払いもできるようになり、より継続的な事業に向けて歩みを進めている。

	実施日（実施／計画）	宿泊組／来場者数	売上げ
2019年	18日間／20日間	199組／584人	625,500円
2020年	19日間／28日間	301組／965人	1,217,800円
2021年	10日間／35日間	141組／431人	965,200円
2022年	27日間／30日間	321組／1,228人	2,003,050円

■実施する上での課題
他イベント等との日程調整が大変
他イベントと場所や日程の調整が大変。特にイベントが多く行われる秋シーズン（キャンプ事業にとってもベストシーズン）の営業日が確保できない。行政が主催して行うような大規模なイベント等での同時開催ができないのか。今後協議をしていきたい。

設備面の充実化
利用者には河川敷外のトイレや洗面を使用してもらっているがキャンプ地からだと少し距離がある。また、トイレの数も足りているとは言い難く、周辺開発と合わせて共用利用ができる設備の充実化が望ましい。

スタッフ体制の強化
現状は謝礼を支払っているとはいえ、まだまだボランティアスタッフに頼っているところも多い。事業の収益化をはかり専門スタッフ（有償）を育成し、それらを核にしたスタッフ体制を整えていきたい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
事業の継続と安定化
年間を通じて事業を実施できるよう継続していたい（単年度の売上げ目標：500万円）。他イベントと共同実施等も増やすことで営業日を確保したい。また宿泊費以外にも「ギアの貸出しサービス」や「設営・撤収サポート」などのサービスの充実化も図り、よりキャンプビギナーの方が安心して参加できる環境をつくっていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
まちへの波及効果の実現と実施エリア拡大
キャンプ利用者を対象とした「まち散策コンテンツ」や利用者が自由にまちを楽しめるマップ等を整備し、キャンプだけじゃなくまちを楽しむことができる仕組みを確立したい。また、額田地区（乙川の上流部）でのキャンプ事業にも挑戦し、物理的に乙川を流域全体で楽しんでもらうプログラムに育てていきたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
乙川キャンプの浸透
乙川と言えばキャンプだよね！と誰もが思うぐらい乙川のまちなかキャンプが浸透している。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

日本で一番愛される川を目指す

プロジェクト名：おとがわリバークリーン
実施団体名：ONE RIVER
実施ゾーン：乙川エリア一体
プロジェクト開始年：2017年～（5年目）

■事業概要
毎月第2土曜日に実施してる環境美化（ゴミひろい）活動。ONE RIVERの声かけにより集まった有志により、約１時間河川敷や川底に落ちているゴミひろいを行っている。また、年に一度12月の第２土曜日は規模を拡大しイベント形式にして実施。いつものゴミひろいに加えてゴミの分別やワークショップなどを行い、参加者とともにそのゴミがどこから来たのかを考える場を設けている。

■プロジェクトの実施状況

- 2017年の開始から現在に至るまで、約50回程度のリバークリーンを実施している。2021年から春に行われる桜まつりに合わせて「桜まつりクリーン」を実施したり、ゴミを出さないことを目指し、地産木材を使用して制作した「くるくるトレイ」プロジェクトを始動するなど活動の広がりも生まれている。毎回20〜30名ほどの方が参加し、近年では地域の方々との連携や企業参加の方々も増え始めてい

■実施して見えてきた成果

- 指定管理者による日々の清掃活動の成果もあると思うが、年々ゴミは減ってきれいになってきている。また、リバークリーンへの参加者が数を重ねるごとに増えている。
- ゴミをひろうだけではなく、子どもたちが遊んだり、大人がおしゃべりをしたりとゴミひろい後の時間が交流の場になっている。
- 昨年から、乙川で事業を実施する団体から寄付をいただくようになり、それら寄付金を使い、ゴミ袋やバケツ等を購入するという良いサイクルが生まれている。

■実施する上での課題

ひろったごみの処分方法の検討

ひろったごみを置いておく場所がない。また処分費も現在はONE RIVERの活動費から捻出しているが、企業または個人などの協賛に頼るなどリバークリーンの多様な参加方法の検討が必要。

駐車場や備品の不足

参加者が増えてくるとバケツ等の備品が足りなくなるが、保管場所も広くないので増やすのも難しい。また、イベントと日程が被ると駐車場がなかったり活動実施が難しいこともある。

ゴミひろい以外の楽しみ方の確立

夏場はごみがあまりないので、ゴミひろい以外の楽しみ方の工夫が必要。また、ゴミや環境問題への意識が薄い人にも気軽にイベント感覚で参加してもらえるよう精神的なハードルを下げる工夫が必要。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

乙川のゴミの問題を考える人が増える

参加してくれる一般の方が増えるのはもちろんのこと、企業にも参加していただいたり処理の部分でご協力いただき、この地域全体で乙川のゴミと向き合う状態をつくっていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

ゴミを出さないということも意識できるまちに

ゴミをひろうだけではなく、ゴミを出さないという文化を生み出していきたい。そのためにイベント時の使い捨て容器の軽減など実験的な取り組みにも挑戦していきたい。コンポストの取り組みなど、イベントで出る生ごみについても考えていきたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）

岡崎市民みんなが乙川を大切に思っている

ゴミを出さないというだけではなく、自分の暮らしと乙川の関わりを市民みんなが関心を寄せて考え、乙川をみんなで大切にしていくまちになっている。岡崎市民の多くの方が乙川のゴミ問題に関心を寄せることで、流域全体で川を大切にする文化を生み出していきたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

暮らす人にも訪れる人にも、欠かせない岡崎のシンボルに

プロジェクト名：岡崎城下舟あそび
実施団体名：ツツイエンターテイメント
実施ゾーン：水上ゾーン
プロジェクト開始年：2016年～（8年目）

■事業概要
2008年から岡崎市と商工会議所の共同事業として乙川の舟運事業がスタート。その後、舟運事業を市民の楽しみや観光資源としてPRしたいという想いから、ツツイエンターテイメントが岡崎市とともに調整や整備を行う。5年間の準備期間を経て、2016年から実証実験を開始。2018年から民間による有料運航がスタートし現在の形に。2022年は春、夏、秋と水位が高い時期に15～20名を乗せる舟で舟運事業を実施。また、桜の時期の花見舟、夏の花火大会には花火舟と乙川の観光に合わせた事業も行う。ブライダル事業者と連携した結婚式の舟の運行や、夜間景観を活用したボートグランピング事業も行っている。

■プロジェクトの実施状況
過去5年間の運行実績は以下の通り。2020年～2021年は新型コロナウイルスの影響により事業規模を縮小しため利用者数が減少している。2022年以降は通常通りの運行が可能になったこと、夏運行の認知も高まったこと等から利用者が増加。売上げ面でも最高売上げとなった。

年	運行内容	運行期間	運行日数	利用者
2018	桜まつり	3/24～4/20	16日間	6,633人
	夏運行	8/11～8/20	7日間	65人
2019	葵桜運行	3/7～3/11	5日間	33人
	桜まつり	3/18～4/5	15日間	7,021人
	夏運行	8/10～8/25	8日間	45人
2020	桜まつり	3/18～4/5	14日間	1,120人
	夏運行	7/23～10/4	15日間	41人
2021	桜まつり	3/17～4/7	18日間	1,350人
	夏運行	7/22～8/22	10日間	61人
2022	桜まつり	3/19～4/6	17日間	7,080人
	夏運行	7/9～9/25	24日間	623人

■実施して見えてきた成果
昨年、一昨年はコロナの影響を受けて厳しい状況だったが、2022年から営業利益が出るようになった。夏のボートグランピングは人手がある桜の時期とは異なり、SNSなどの広報により集客をしないといけないが、年数を重ねるごとに少しずつ認知されてきた。

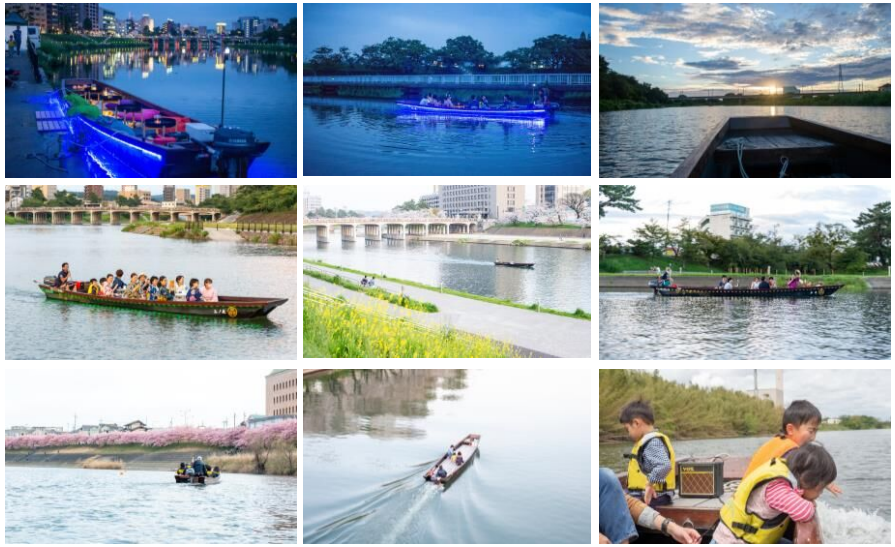
■実施していく上での課題
- 人件費や燃料費の高騰があり乗船料の値上げも検討が必要。
- 夏季は突然の水位上昇などがあり舟の避難などが大変。
- 岡崎市の観光産業を盛り上げるためには連携力が必要。観光がハブになってプロデュースする民間チームが必要。拠点事業者や活用事業者も一緒にエリアを検討する場を設けてほしい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
年間100日間の運行を達成する
岡崎市の乙川での舟の運行の全国認知度を上げ、年間100日運行を目指す。桜の時期はこれ以上運行日数を増やすのが難しいため、水位が確保できる夏の平日の日数をいかに増やすかがポイントになる。旅行代理店と連携して観光客の誘致を行いたい。また、11月の水位をもう少し長く上げてもらえるよう調整を図りたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
海外からの観光客を呼び込む
インバウンドを対象とした多言語対応を行い、海外の旅行代理店との契約を行い、岡崎市を観光産業都市として人に知ってもらう。

③長期目標（50年後にありたい姿）
岡崎を住んでも、働いても、訪れてもいいまちに！
金沢を越す観光産業を育成し、岡崎市の産業の一つの柱とする。岡崎を住んでいい、働いていい、訪れていいまちにしたい。



「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

SUPが浮かぶ風景を乙川の日常に

プロジェクト名：乙川SUP体験
実施団体名：waileo SUP school＆tours
実施ゾーン：水上ゾーン
プロジェクト開始年：2016年～（8年目）

■事業概要
SUPが浮かんでいる乙川が日常風景となり、またこの場所からSUPボードをもって海や山へ繰り出していく。そんな拠点になることを目指して乙川SUP体験事業が行われている。事前予約をすることで、ボードやパドルなど必要な備品とインストラクターの指導をセットにしたSUP体験ツアーの実施や、乙川河川敷で行われるイベントへの出店も行っている。

■プロジェクトの実施状況

- 水上にて行われるSUP体験プログラム。オンシーズン（3月下旬～10月上旬）は予約制でプログラム「乙川SUP体験」を実施している。
- 過去５年間の実績は以下の通り。通常のSUP体験会の他、桜まつり期間中に実施するSUP大会「SAKURA SUP FESTIVAL」や平日の朝と夕方時間限定の定額プログラム「朝SUP・夕SUP」の他、ヨガや他アウトドアスポーツと連携し、体験をテーマにしたイベント「experience market 乙川TRY」等のプログラムを実施している。

年	実施期間	営業日数	体験者数
2018	3/24～10/8	10日間	77人
2019	3/25～10/6	16日間	49人
2020	3/7～10/4	36日間	133人
2021	3/24～4/11、4/30～10/3	21日間	87人
2022	3/20～4/6、4/30～10/4	38日間	133人

■実施して見えてきた成果

- 体験してくれる人の数が年々伸びている。事業の認知度も上がってきていると感じている。
- SUP体験会の他に、いくつかプログラムを立ち上げることができた。

■実施していく上での課題

- より多くの方に体験してもらえるよう、平日もスタッフが常駐できるのが理想。そこを目指して事業を組み立てていきたい。
- 年間を通して安定した事業計画が必要。オフシーズン（11～3月）も売上げが上がるような事業を考えていく必要がある。
- 備品を保管する艇庫をなるべく乙川に近い場所で確保する必要がある。周辺の開発事業の中の川の駅構想がどうなるかが気になる。
- 河川敷で他のイベントがあると催行ができないことがある。突然の予約者への対応の両立が難しく、円滑な活用のための調整が必要。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
事業の安定
スタッフ１名を雇い、オンシーズン（4～10月）には月商100万円。オフシーズン（11～3月）も収入が得られるような事業を実施し、年間を通して事業の安定化をはかる。

②中期目標（10年後にありたい姿）
設備も整いいつでも乙川でSUPができる
乙川沿川の拠点整備によって、シャワー室やロッカー等があり、いつ来てもSUPが楽しめるという状態になっている。その際にはWaileoとしても何かしらの拠点を持ち事業を行っている。

③長期目標（50年後にありたい姿）
平日もにぎわう乙川
SUP体験ツアーやイベントの開催を通じて、この場所が様々な挑戦や体験に出会える場所にしたい。その結果、50年後には乙川が平日もにぎわい、あたり前に市民みんながSUPに乗り、乙川の心地やさ体感している状態になっている

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

自転車でまちと人、人と人をつなぐ

プロジェクト名：スポーツバイク・マウンテンバイク体験会
実施団体名：サイクルぴっとイノウエ
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2017年～（7年目）

■事業概要
河川敷が車と分離されて自転車で走りやすいという利点に加え、岡崎には史跡や魅力的な場所が市内に点在していることから、市内を回遊するのに最適な乗り物として自転車があると考え、その可能性を伝えたいという想いで乙川河川敷での活動を行っている。
一般的な自転車だけではなくスポーツバイクやeバイクの体験を通じて、これまで知らなかった自転車の魅力や可能性を参加者に伝えている。

■プロジェクトの実施状況
スポーツバイク・MTB体験会の他にも以下の事業を乙川エリアで実施している。体験会は毎回100人程度の方が参加し好評。最近は上流部での活動（トレイルライド・ロードクリーン等）も開始している。

①スポーツバイク・マウンテンバイク体験会
乙川河川敷をフィールドにした自転車の体験会。子ども用から大人用まで様々な自転車を用意して好評な企画。子ども向けには自転車教室も開催している。

②レンタサイクル
乙川河川敷を発着点としたレンタサイクル事業。殿橋テラスの運営期間中などに実施している。レンタサイクルに合わせたツアー企画も検討中。

③サイクリングツアー
案内人とともに市内をまわるサイクリングツアー事業。市内の史跡やおススメスポットをまわります。Eバイクを使用したツアーも実施。

■実施して見えてきた成果
体験者数が増え、店舗への来客誘導も実現
自転車にふれる機会を増やす、乙川の河川敷を走る気持ちよさを知ってもらうという体験会の目的は十分に果たせている。体験会実施後に、お店への来店者数が増えているので事業にもつながっている。

■実施していく上での課題
乙川周辺への出店に向けての準備
乙川エリアに出店したいという思いはある。候補となる場所探しやスタッフ育成、体制など今後に向けて準備していくことが必要。

発信力をつけていきたい
SUPなどは橋の上からもよく見えてインパクトがあるが、自転車はそこまでのインパクトはないので、どのように発信するかが課題。絆の森での活動や清掃活動（ロードクリーン）にもいろんな人に参加してもらうことで活動の趣旨や想いももっと理解してもらう努力が必要。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
乙川に拠点を持つ
乙川エリアに拠点（店舗）を持つことを検討しているが、現在のお店のように車を店の横に横づけできるような場所を探すのが難しい。乙川エリアでの店舗はテーマを変え「体験」に特化するなど工夫が必要。

②中期目標（10年後にありたい姿）
回遊ネットワークの拠点になる
自転車を移動手段のツールとして販売したり、貸したりだけでなく、コミュニケーションをとりながらエリアのおススメ情報を紹介する観光案内所の役割を担うような拠点の運営を目指したい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
乙川をだれもがチェレンジできる場所に
資金がないと出店できないとなると、小規模でやっている人が減っていくような気がする。太陽の城跡地にできる拠点も、チャレンジできるスペースなど、多くの方に関わりしろがある公共施設になると良い。サイクルぴっとイノウエとしては、事業性を持って拠点の骨格を作る役割として関わりたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

ヨガを通じて、このまちに貢献する

プロジェクト名：おとがわサンデーヨガ
実施団体名：STUDIO ALMA
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン、桜城橋ゾーン
プロジェクト開始年：2021年～（2年目）

■事業概要
2021年7月から毎月第3日曜日に実施している定期プログラム。主催者は「自分たちにできることで、このまちに貢献したい！」と、ヨガのプログラム参加費を寄付金制度で実施している。集まったお金は「おとがわリバークリーン」や「桜城橋ふき」に寄付し、バケツなど活動に必要な備品の購入につながった。また、ヨガ体験を通じて自分の心と体と向き合う時間を一人でも多くの人に持ってもらうことで市民の健康増進に寄与したいとも考えている。
2年間の実施により、朝の気持ち良い時間に乙川でヨガをするという風景が少しづつ日常になってきている。

■プロジェクトの実施状況

- 2021年7月よりプログラム（おとがわサンデーヨガ）をスタート。以降は毎月第3日曜日を開催日とし、定期開催プログラムとして実施している。2022年以降は、ONE RIVERが主催して行うイベント（川びらき、川あそび、川ぐらし）にも参加している。
- 気楽にヨガを楽しむ方を増やしたい！というプログラムの性質上、体験料はとらず「ドネーション制（寄付制）」で実施している。集まった寄付金はONE RIVERに寄付し、「おとがわリバークリーン」や「桜城橋ふき」などの活動資金となっている。

	開催期間	開催日数	利用者	寄付額
2021年	7/18〜11/21	4日間	93人	54,050円
2022年	5/15〜11/20	5日間	90人	34,310円
	5/22（川びらき）	1日間	13人	2,225円
	7/24（川あそび）	1日間	17人	3,300円

■実施して見えてきた成果

常連や遠方からの参加者が増えた

川でヨガをすることが日常化している感じが嬉しい。サンデーヨガをきっかけにスタジオにレッスンを受けに来てくれた方もいた。また、市外から来てくれる方もおり広がりを感じることができた。

この場所の魅力を発見

スタジオとはちがう幸福感があると感じている。森の中のような完全な自然の中とは違う雑踏も、乙川にはあってそれがこの場所の良さだということに気づくことができた。

■実施していく上での課題

- 小雨であれば殿橋下で実施できるのでそこは安心だが、3.4.10.11月は雨だと気温が下がるためアウトドアでは限界。実施時期や中止判断をどうするかが検討課題。
- 外国人の方や障がいをお持ちの方等、誰もが来れる場所になると良いと思っている。企業向けのヨガ体験コースも検討していきたい。
- 周辺開発の一環で共用スペースなどあれば使いたい。2023年からSUPヨガも実施するので、SUPが保管できる場所などあれば助かる。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

おとがわサンデーヨガの継続とヨガフェスの実現

健康増進やライフスタイルの提案をテーマに出展者さんを募りながら、少しずつ準備し、事業性のあるイベントとして実現したい。

法人向け体験プランの実施

組織内のチームビルディングをテーマにした企業向け研修プランを実現する。企業のイメージアップとして福利厚生は求められているので需要はあると感じている。

乙川エリアの拠点の活用

乙川エリア周辺の拠点開発によって、シャワールームや備品倉庫ができれば活用も検討したい。室内スタジオも価格など条件が合えば雨の日や寒い日のヨガ会場として使えるかもしれない。

②中期目標（10年後にありたい姿）

新規出店をする中のひとつとして川沿いも検討

ヨガスタジオと合わせて経営しているキャンプ施設「DAY FOREST NUKATA」を利用して、山間部とまちなかの連携プログラムを実現したい。また新規出店の候補の一つとして川沿いも検討したい。

③長期目標（50年後にありたい姿）

週末になるとヨガウェアを来た人が歩いている乙川の日常が理想

まちの人が自分を大切にして、自分と向き合う時間を作っているような社会を実現したい。また週末になるとヨガウェアを着た人が自然に現れ、乙川の日常を生み出している状態を目指したい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

自然の中で走る喜びと楽しさを提供

プロジェクト名：オカザキリバーサイドマラソン
実施団体名：オカザキリバーサイドマラソン実行委員会
実施ゾーン：乙川エリア一体
プロジェクト開始年：2019年～（5年目）

■事業概要
2019年から実施している乙川河川敷を利用したマラソン大会。ハーフマラソン、ハーフリレーマラソン、クォーターマラソン、3.5kmラン、1.5kmキッズラン高学年、1.5kmファミリーランの6種目を実施し、1000人規模のランナーがエントリーする大会となっている。
名古屋の事業者と地元岡崎の活動団体が協力する実行委員会形式をとることで円滑な運営体制を作っている。今後は、より多くの事業者や団体と協力し大会やイベントを実施していく予定。

■プロジェクトの実施状況

- 2019年10月より事業を開始。以降は年に一回（秋ごろ）のペースで継続的に大会を実施している。エントリー数は河川敷の規模（周辺駐車場の数等）から1,000人程度で収まるようにしている。
- 2021年からは大会の企画サポートをONE RIVERが実施したり、当日の体操をSTUDIO ALMAが実施するなど徐々に地元事業者と連携したプログラムになってきている。
- 参加賞やオリジナルグッズ等も開発し、大会のブランディングにつなげている点も特徴的。

	開催日	エントリー数
2019年	10月20日（土）	1,000人
2020年	10月10日（土）	890人
2021年	9月26日（日）	930人
2022年	9月18日（日）	1,268人

■実施して見えてきた成果

- マラソン大会を実施したことがない場所で主催するという良い経験になった。これまでに４回実施し毎回エントリー数は増えている。
- 1000人ぐらいが最も効率よく大会を実施できることが分かった。トイレや駐車場問題も考えるとこれぐらいが妥当。単体事業で黒字化もできている。
- 当初からデザインやロゴなどを同じデザイナーの方にお願い（監修）していたため大会としてのブランディングができた。
- 行政や管理者ではなく、地元を盛り上げたいという方達（ONE RIVER等）と協議して大会を実施する方法ができたことは大きな成果。地域に思いを持った方々と行うといろいろな点でスムーズにいくと実感している。

■実施していく上での課題

- 大会規模を拡大するにはトイレや駐車場が課題（足りない）となる。
- 吹矢橋歩道は幅が狭く危ないので、吹矢橋奥まで走ったり、伊賀川を走るなどコースを再検討する必要がある。一時的でも良いのでフロート等で川を横断できると面白い。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

リバーサイドマラソンとは別のランニングイベントの実施

地元の企業さんを巻き込み、もう少し地域寄りのランニングイベントを年に１回実施したい。走った後にサンドイッチとビールを食べるとか、夕方走るトワイライトランと宿泊のセット。モーニングランとサンドイッチのセットなどを考えている。地元の団体と協力して協賛や協力体制をとったり出店者の募集も考えたい。

定期的なランニングの実施

毎月第３土曜日の朝にパークラン（QURUWAランの復活）を実施したい。ランニング後のまち歩きなどアイデアのあるものを実施していろんな時間の乙川のよさを感じてもらいたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

拠点開発に合わせて活動を考えていきたい

乙川周辺エリアに企業主導のランニングステーションができたら使いたい。子どもたちが遊びに来たりもっとにぎわう姿をみたい。
企業などを誘致してランニングやヨガなど運動をしながら集える場所、そのためのトイレやシャワーなどの設備があると良い。

③長期目標（50年後にありたい姿）

グローバルなランニング文化の普及

もっとグローバルなランニング文化をつくっていきたい。アニメイベントなどをやると海外から人が来ると思うし、岡崎城もあるので観光都市としてもっと集客ができると思う。マラソンもアニメイベントとタイアップしてやるのも面白い。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

他にはない地域に根差したナイトマーケットの実現

プロジェクト名：乙川ナイトマーケット
実施団体名：乙川ナイトマーケット実行委員会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2017年～（7年目）

■事業概要
岡崎城下を流れる乙川河川敷で、「岡崎名物の一つとなるような夜市を開催したい。」「私たちの街を、私たちの手で、楽しいものにしたい。」そんな想いで2017年から始まった夜市。夏から秋のシーズンに開催。スタート時は第4土曜日のみの実施だったが、2021年から月に2回の開催に実施回数を増やし第2・4土曜日に実施している。キッチンカーや飲食店と、ワークショップや物販テントなどが河川敷にずらりと並ぶ風景は、乙川の風物詩となりつつある。また、小さな親子連れや高校生のグループも多く、子どもたちにとっても楽しい場所となってきている。

■プロジェクトの実施状況

- スタート時は第4土曜日のみの実施だったが、2021年から月に2回の開催に実施回数を増やし第2・4土曜日に実施している。
- 出店者数は年々増え、現在は100店舗を超えるまでに成長。平均して5,000人くらい方が来場する。3年目からは出店料をもらうようになり、現在は年間で300万円ほど売上げが立つようになっている。

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
実施回数（実施／計画）	8回／〇回	7回／〇回	7回／〇回	11回／〇回	10回／〇回
出店料	無料	有料	有料	有料	有料
総出店者数	151店舗	244店舗	435店舗	1,331店舗	985店舗
平均出店者数	19店舗	34店舗	62店舗	121店舗	88店舗

■実施して見えてきた成果

想定よりも若い人や家族連れが多く来場している

ターゲットは30代ぐらいを想定していたが、思ったよりも若い世代（20代）の来場者が増えている。高校生やお子様連れも多く来ている。

■実施する上での課題

会場のしつらえを充実させていきたい

照明の飾り付けや舞台等があっても良いと考えているが人員不足でできない。舞台を組み、出し物をしてもらい出演料が取れるとよい。

トイレ、駐車場、倉庫などの不足

トイレは毎回10台借りているが費用的に厳しい。右岸を駐車場として使わせてもらえるとありがたいが、景観や置いて帰った人がいた場合にどうするのかなどの問題がある。

倉庫も現在は教育文化会館を借りているが、3トントラックで4往復して運搬している。この量を収納する倉庫を借りるのは経済的にも大変だし、遠くなると運搬時間もかかってしまうことが危惧される。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

岡崎の名所になる

岡崎の観光ガイドブックの巻頭特集で「ナイトマーケットで食べたいもの10選」のような特集を組んでもらえるぐらい認知をあげたい。

地域のお店とのコラボレーション

乙川ナイトマーケットのタンブラーを持って協賛店に行くとサービスがもらえる等のサービスを充実化してナイトマーケットと地域のお店の両方を楽しんでもらえるようにしたい。

多様な出店者に出てもらいたい

アジアのマーケットのような歩いて物販など、いろんな商売の形を受け入れる場になりたい。そのために必要な課題解決に向けて動いていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

後継者を育てる

誰かほかの人が実施できる体制にしたい。ある程度の収益化ができれば、やりたい人が出てくると思う。今は何も経費を使わなければ利益がだせるようになってきているが、もう少しパッケージ化して事務員1人で回せるようにしたいと思っている。

③長期目標（50年後にありたい姿）

岡崎の文化に

ナイトマーケットという文化は残していきたい。収益があげられる形にして次の世代に引き継ぎ、夜市が岡崎（乙川）の一つの文化にしていきたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

岡崎を愛犬と共に楽しめるまちに

プロジェクト名：犬市場
実施団体名：WAN‘S team合同会社
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン、北側ゾーン
プロジェクト開始年：2020年～（3年目）

■事業概要
2020年にスタートした愛犬と一緒に一日中楽しめるドッグイベント。こだわりの愛犬グッズのマルシェはもちろん、ドッグラン、舟、SUPやヨガなど愛犬と一緒に楽しめるアクティビティも行われている。広々とした河川敷を活かし自然の中で愛犬と共に食事をしたり買い物を楽しめる場所として活用している。

■プロジェクトの実施状況

- 入場料500円／日の有料イベントとして実施し、5,000人～10,000人規模の来場者を集めている。※2022年に実施した夜市は入場無料。
- 犬グッズを集めたマルシェ、フードエリア、舟やSUPなどの水上アクティビティや、ヨガ、ドッグランなども楽しめる。
- 出店者、来場者ともに近隣地域を中心に全国から集まってきている。

年		日数	出店数	来場者
2020	Autumn	1日	マルシェ99ブース、飲食16ブース	5,000人
2021	Spring	1日	マルシェ127ブース、飲食25ブース	1,380人
	Autumn	1日	マルシェ144ブース、飲食31ブース	5,650人
2022	Spring	2日	マルシェ171ブース、飲食35ブース	7,000人
	夜市	1日	マルシェ102ブース、飲食27ブース	4,500人
	Autumn	2日	マルシェ168ブース、飲食34ブース	6,300人

■実施して見えてきた成果

コロナ禍でのイベント実施モデル

店舗間の距離、来場者の名簿管理など、コロナ禍において国の厳しいガイドラインを守りながらイベントを実施できた。

乙川河川敷の両岸を活用したイベント実施

調理の匂いが商品につかないようにする配慮から、右岸はグッズ販売の有料エリアで左岸はキッチンカーとエリアを分けた。そうすることで左岸のフードエリアだけを楽しむ犬連れじゃないお客様が増えた。

まちへの波及効果

イベントの来場者が近隣のお店へ寄ったりするなど、まちへの波及効果をもたらしている。

■実施する上での課題

駐車場の不足

来場者数を増やすには駐車場が足りない。実験的に郊外からシャトルバスで来場できる取組み（パーク＆ライド）を行ったがあまり利用されなかった。

河川敷の水はけの悪さ

右岸は雨が降ると河川敷に大きな水たまりができてしまう。大規模イベントがあるときは、河川敷を整地し水はけをよくしてほしい。

近隣住民の理解

有料イベントのため、日常的に乙川を散歩されている方の通り道を一部制限せざる得ない。乙川河川敷はイベントなどでも活用する場であること行政からも発信をしてほしい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

来場者数の拡大

目標としていた出店者数200店舗、来場者数10,000人は達成できたが、さらなる拡大を目指いしていきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

市外・県外への波及

県外から視察があったり、イベント実施をお願いされたりすることもでてきたりしているので、他地域でも犬市場を実施していきたい。全国で犬市場が実施されるようになって、各地の犬市場を巡りたい。

犬イベントのコンサルティング

同様の犬イベントを他地域でやりたいという声があるので、自分たちの経験を生かしてアドバイスをし、イベントが増えていくと良い。

③長期目標（50年後にありたい姿）

犬文化の醸成

日本は海外に比べると犬連れで楽しめる場所が少ない。飲食店や宿泊施設など、犬連れが認められた社会になってほしい。岡崎は犬と一緒に過ごせるまちと認知されるようになってほしい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

出店者さんとともに乙川の素敵な過ごし方を発信しつづける

プロジェクト名：HANDMADE SELECT MARKET
実施団体名：ハセマ実行委員会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2018年～（6年目）

■事業概要
2018年から乙川河川敷で開催。大切な人と過ごす水辺の幸せなひと時を提供することを目的に、物販や飲食提供など、作り手の顔の見えるマルシェを実施している。2020年からはONE RIVERで実施する「川ぐらし」と共に年に１回開催。
乙川の景観の美しさやや心地よさを感じられる仕掛けなど、この場所でしかできないマルシェの実現を目指し、店舗レイアウトや設えにも工夫を重ねている。

■プロジェクトの実施状況
2018年より乙川河川敷での開催を開始（１回目は図書館交流プラザりぶらにて開催）した、2018年に3回（vol2～4）、2019年に2回（vol5～6）、2020年以降はONE RIVERで実施するイベント（川びらき、川ぐらし等）と同時に開催しこれまでに計10回開催している。

■実施して見えてきた成果
大切なのは過ごし方なのだと気が付いた
乙川で開催することにより、気が付くと主役がマーケットではなく「川」になり、テーマが「消費」から「過ごし方」に変わった。多くのお客様に来ていただきたいと思いつつも、来てくれたお客さんがどう過ごしていかに楽しんでもらうかという事に注目するようになった。

出店者さんが乙川の魅力を発信してくれるようになった
出店者さんも、景色がいいとか心地よいと感じてくれて、それを自分の言葉でおすすめの過ごし方や乙川の魅力を発信してくれるようになった。いまはそれをすごく大事にしたい。

■実施する上での課題
集客と景観のバランス
出店者数・集客数と景観のバランスをとることが課題。今年は、出店者数を減らし規模をちょっと小さくすることで景観を美しく使えるようにと考えた。今後も良いバランスを模索していきたい。

岡崎の出店希望者やチャレンジを受け入れる場に
岡崎で頑張っている人をもっと発掘していきたい。また、これから新しく始める人や育休明けなどチャレンジしたい！という人を応援したいと思っている。応募期間の告知を工夫するなどしていきたい。

車での来場者への案内
集客と駐車場と渋滞のバランスは難しい。ただ車で来ても来やすい場所であることは確かなので、近隣の有料駐車場を案内するだけでなく、他エリアのおススメスポット紹介など、工夫した発信がしていきたい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
他のマルシェと連携
今後もONE RIVERと一緒にイベント実施していきたい。良い雰囲気のマルシェが増えてきているので、それらとつながりを持って大きイベントでまちの活性化につなげたい。

出店者さんの目標になれる場所に
マーケットを通して、岡崎にいる隠れた存在が飛躍していくような場にしたい。あのイベントに出ている人なら間違いないと思ってもらえるような場所になりたい。敷居をあげたくはないけど、目標になれる場所でありたい。お母さんが出店している人も多い。子どもやお父さんも一緒に出店して楽しむみたいな空気もつくりたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
手づくりの価値を伝えつづけていきたい
乙川でマーケットをやりたいと思う人が出てきてくれるのは嬉しい。ハセマのような風景を作りたいみたいな人が出てくることを目指したい。また、マーケット内で作り手の想いを伝えるトークイベントやメディア等を立ち上げても良いと思っている。イベント以外でも手づくりの価値を伝えることを続けていきたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
手仕事のよさを大切にするまちに
マーケットの開催を通して、手仕事・手作りの良さや、本当にいいものや気に入ったものを大切に使うという文化を作っていきたい。そのために作り手と使い手をつなぐマーケットを続けていきたい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

環境や健康にやさしい暮らしを日常に

プロジェクト名：オトマルシェ
実施団体名：（株）mono and
実施ゾーン：吹矢橋～明代橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2022年～（2年目）

■事業概要
「丁寧な手仕事による美しいモノ、美味しいモノ」 をコンセプトに、作り手が直接使い手に販売することを大切にしたマルシェ。毎月1日8:00～12:00にオトリバーサイドテラスの中庭と乙川沿いの歩道を利用し開催している。イベントとしてのマルシェではなく、日常品を地域の人が当たり前に買いに来る普段使いのマルシェを目指す。マイトレイやマイバックの利用はもちろん、コンポストの設置や種の交換会なども毎回実施。

■プロジェクトの目的
2022年からオトリバーサイドテラス内で始まった定期市。「丁寧な手仕事による美しいモノ、美味しいモノ」 をコンセプトに、作り手が直接使い手に販売することを大切にしたマルシェを実施している。

目的①：定期市としての定着
イベントとして遊びに来るというよりも生活に必要な日常品を毎月買いに来る定期市にしたい。
目的②：地域の人とお店がつながれる場所になる
スーパーとは違うお店の人との会話を楽しみながら買い物ができる場所にしていくことで、お気に入りに出会える場所にしていきたい。
目的③：憧れの暮らしを見つけてもらう。
こんな暮らしが素敵だな。いいな。やってみたいな。と思えるようなスタイルを提案できるマルシェにしたい。

■実施して見えてきた成果
１年間大きな問題なく実施できることが分かった
- もっとも集客があったのは9月の週末。300人ほどの来場者数があった。まだまだ認知がされていないため、リピーターというよりも新規の方が多い。車で遠方から来てくれる人が多い。
- 西尾で10年前から開催している「モノマルシェ」に比べ、仕事の前や子どもを送る前に寄っていくというよりも、家事や子どものことを済ませてお友達と遊びに来る方が多い。
- 来年も同様に続けていきたい。まちに繰り出すようなイベント、地域のお店や施設と一緒に実施するワークショップにも挑戦したい。

■実施する上での課題
近隣の方への周知
インスタグラムなどで知り遠方から車で来てくれる人は多いが、歩きや自転車で来れる距離の人にももっとたくさん来てほしい。おばあちゃんが乳母車で買いに来るような風景も作りたいので、そういった地域の人にどう情報を届けるかが課題。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
まちに根付いた定期市に
今よりも地域に定着した定期市にしたい。まちの人や施設とのコラボも実施していきたいと思っている。乙川の清掃活動や、お買い物の後にまちを歩くツアーなども今後は検討していきたい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
オトマルシェのようなマルシェが増えていく
私たちができるのは月に一度だが、食料品を購入するにはもっと頻度が必要なので、オトマルシェみたいなマルシェや、オトマルシェが提案する暮らしっていいなと思うような人が増えて、同じような思いをもったマルシェが増えていってほしい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
子どもたちの世代にも思いが継がれている
オトマルシェで会話をしながら買い物をしたり、情報交換をするという場所を今の子どもたちはここで体験してくれているので、それを引き継いでこういう場所が続いていてほしい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

水中でも陸上でもトレーニングできる乙川に

プロジェクト名：ジュニアランニングスクール
実施団体名：ランニングスクールST
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2020年～（3年目）

■事業概要
毎週月曜夕方と土曜朝に乙川河川敷で行われている小学生向けランニングスクール。スクールは、別の曜日に中央総合公園と井田公園でも行っている。生徒数は20～30人程度。ONE RIVERのイベントで、ランニング教室をしたことから、イベント実施後に問い合わせや生徒が増える傾向にある。特に2022年の川ぐらしのあとは、問い合わせが多かった。河川敷向いのマンションの自宅からランニングスクールの様子を見て、参加している人もいる。

■プロジェクトの実施状況

- 2020年6月～乙川河川敷で開催している小中学生を対象にしたランニングスクールプログラム。毎週月曜日（16:00～）、土曜日（8:00～）をベースに定期的に開催している。生徒数は毎回およそ20～30人くらいの子が参加している。
- プログラムは年間を通して変えている。運動会前は短距離、マラソン大会前は長距離などがメインのトレーニングになる。練習する場所は屋外が多いので、拠点が必要という考えはない。拠点がなくても生徒さんは増やしていくことができる。

【レッスン内容（90分）】
①あいさつ、②体操、③フォーム作り体操（腕振りなど）
④ドリル練習（動きながらのフォーム作り体操）、⑤メイン練習
⑥お楽しみ練習（鬼ごっこやリレー対決など）、⑦体操、⑧あいさつ
※⑤⑥はマラソン大会や運動会に合わせて都度変更しながら実施

■実施して見えてきた成果

生徒が増えてきた。
他の公園と比べても人目につきやすいという利点がある。また河川敷でのイベントに出店することで活動を知り生徒が増えてきている。

練習場として使いやすい
園路を回遊するコースが取れ、坂道や堤防の階段を利用できる。冬は砂地でダッシュもでき、トレーニング場所としては使いやすい。

雨の日でもスクールが開催できる。
他の公園では中止にしなくてはいけない雨の日でも、殿橋の下が使えるのでありがたい。習い事としてはなるべく中止にしたくない。

■実施する上での課題

- 夏は日が長いので心配ないが、冬は暗くなるのが早く、5時半の部が真っ暗。足元が見えなくて転ぶ危険性の怖さと、トイレも小さい子たちだけでは行かせられないという防犯上の怖さがある。
- 送迎だけなので駐車台数には問題はないが、出入りの時の渋滞（行と帰りの車が交錯する）が少し不便に感じる。
- 土曜日に大きなイベントの時には実施できないのはわかるが、休みを作りたくないので何かしらの形で共存したい。場所は多少変わってもできるのでできる方法を協議したい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

アクアスロンの実施
水泳とランニングを行う「アクアスロン」という競技を乙川で実現したい。また、乙川の場所の特徴を生かした水中を使ったトレーニング（水泳）を実施したい。現在はプールでやっている7:00～9:00のプールの枠を乙川に持っていけたら良い。

新しくできる拠点を上手に活用していきたい
シャワールームやロッカールームができれば、利用も検討したいし、日常的にランニングや自転車で走っている人にとってはすごく活用しやすくなると思う。拠点があることは大賛成。

②中期目標（10年後にありたい姿）

強い選手の輩出だけではなく、健康増進プログラムも実施
強い選手を輩出していくの同時に、年配の方の運動するきっかけづくりにも取り組んでいきたい。単発の大人向けのランニング教室やポールウォーキングの教室も検討したい。

③長期目標（50年後にありたい姿）

水中プログラムの実施を乙川の日常風景に
乙川に陸地のトレーニングとともに水中トレーニングもしている姿が日常的な風景になっていてほしい。トライアスロンやランニングにとらわれない、健康増進の活動が行われる場所を目指したい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

朝市とプランター菜園を市民の憩いの場に

プロジェクト名：新鮮野菜の朝市
実施団体名：NPO法人おかざき農遊会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン
プロジェクト開始年：2016年～（8年目）

■事業概要
家庭菜園や公園での栽培体験を通じて、健康な体をつくり仲間を増やしていく「菜園都市おかざき」の実現に向けて活動している。その活動の一環として生産者がつくったものを直接販売する「新鮮野菜の朝市」を月に２回乙川河川敷で実施している。2016年から継続して実施することで、常連のお客さんも増え、生産者さんとの会話をしながら野菜を買うという新しい日常が生まれてきている。

■プロジェクトの実施状況

- かわまちづくりがスタートした2016年から継続して実施しているプログラム。毎月第１・３土曜日の月２回のペースで会員のつくった朝採れ野菜を販売している。
- また団体として「菜園都市おかざき」の実現を目標にしており、その一環で市内小学校や公園でのプランター菜園の指導も行っている。

【菜園都市おかざきの目指す姿とは？】
①家庭菜園をすることで体を動かし、自分の作った野菜を食べ、健康になる。
②まちづくりの新しい形として公共の場所である公園で共同で野菜を栽培し仲間をつくる。またその一環で作った野菜を朝市で販売。市内小学校や公園でプランター菜園の指導も実施する。

■実施して見えてきた成果

お客さんが増えている

5、6年継続して人がつくようになってきたと感じている。農家は年々減ってきていいるが、生きていくために大事なことは食べること。食べることを真剣に身近に感じてもらうことが大事だと感じているのでこれからもたくさんのお客さんに来てもらいたい。

■実施する上での課題

実施日の調整

毎月第１・３土曜日に出店したいという希望に対して、他イベントとの調整により実施が制限されることが多い。定例イベントなのでできるだけ実施したいと考えている。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

朝市の充実

朝市を実施する同じ時間帯にプログラムを実施してもらうことで、朝の時間帯の賑わいや魅力をつくっていくことをしたい。

菜園都市おかざきのPR

人目のつくところ（殿橋テラス・桜城橋）で、プランター菜園を実施し、菜園都市おかざきの実現に向けた活動をPRしていきたい。また、QURUWA内の公園で菜園を実施することで水やりや収穫などを通じて地域の方が顔を合わせる場所をつくっていきたい。公園は総代さんと愛護会がしっかりしていると、きれいに管理されるので、野菜作りを一つの手段として、きれいな公園づくりにも貢献したい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

自宅で菜園をする人が増えている

お年寄りが増え、モビリティが変化し、車社会ではなくなるのではないか。歩く方にシフトしQURUWAが賑やかになってくると思う。緑のある場所が拠点になって、毎日の触れ合いの場になるとも考えている。公園の菜園がうまくいくと、自分の家でプランター菜園をしてくれると思うので、公園をハブにしながら、自宅で野菜を育てる人を増やしていきたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）

生きていくための農業に真剣に取り組んでいる。

菜園は必ず残る。農業は生きていくための基本なので、日本は食べ物に対してもっと真剣に取り組まないといけないといけない。菜園都市おかざきを実現し、誰もがそう思えるようになってほしい。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

星や月の観察を通じて、自然を愛する心と大きな夢を育む

プロジェクト名：おとがわ星空観望会・月待会
実施団体名：岡崎星と遊ぶ会
実施ゾーン：殿橋～名鉄鉄橋 南側ゾーン、桜城橋ゾーン
プロジェクト開始年：2016年～（8年目）

■事業概要
2016年から、まちなかでありながら空が開けていて暗いという河川敷の特徴を生かし、天体望遠鏡を並べ星空観望を行っている。2021年からは桜城橋の上で毎月満月の日に月が登る様子を楽しむ月待会も実施。多くの人に星空に親しんでもらうことにより、宇宙の広大さや自然の美しさを感じ、大きな夢や広い心を育むことを目的としている。今では活動が定着し、皆既月食などの天体ショーが見られるときには、人混みができるほど賑わっている。

■プロジェクトの実施状況

- 2016年から乙川での活動を開始。定期開催プログラムとして「おとがわ星空観望会」を数年にわたって実施。2021年からは桜城橋上で月の出を見る「月待会」も開催している。
- 星空観望会や月待会などのプログラム実施にとどまらず、もっと自然や星を楽しむための工夫として「ほしクラフト」「ほしクイズ」「星空紙芝居」「ほしダンス」などのオリジナルコンテンツを考え実施することで、様々な観点からの星の楽しみ方を普及している。
- また、近年では乙川上流部（わんパーク、みつわ広場）でのプログラム開催も徐々に増やしてきており、それらも合わせると年間で50回近くのプログラムを実施するようになった。

年	運行内容	実施回数	参加人数
2018	おとがワ！星空観望会	8回	718人
2019	おとがワ！星空観望会	9回	601人
2020	おとがワ！星空観望会	3回	422人
2021	おとがわ星空観望会	2回	137人
	月待会	9回	260人
2022	おとがわ星空観望会	3回	320人
	月待会	8回	379人

■実施して見えてきた成果

- 活動をはじめた当所から考えていた、人の多いまちなかで観望会を実施しそこで興味を持ってくれた人に、より多くの星が見られる山間部での観望会に足を運んでほしいということが形になってきた。
- 月待会は「月の出」にこだわると外出しにくい時間帯に重なり、人の集まりが悪いことがある。そのため最近は、19時からと時間を決め実施するようにした。季節によって出てくる時間や場所が違うことを感じてもらえるのもよいきっかけと捉えている。

■実施する上での課題

- 安全面をどのように担保するかというのは常に課題。明るいと星が見えないし、暗いと危ない。コロナのおかげで望遠鏡が覗けなくてもモニターを使うなどスキルアップすることができた。天王星が月に隠されるのをみんなでモニターで見ることもできて良かった。
- 月待会はまだまだ集客に課題がある。月に一度ぐらい定時で仕事を終えて月を見てみるという文化をもっとひろげていきたい。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）
満月を意識して暮らす人が増えている
みんなの意識が満月の日は残業をやめて帰ろう。となるなど、もっと心に余裕を持って暮らしている人が増えていてほしい。
難しく考えるのではなく、月を見ながらお酒を飲むとかおしゃべりをするという環境を楽しめるようになるとよい。

②中期目標（10年後にありたい姿）
まちをあげて、自然を大切にしている
行政の人にも意識してもらい、まちをあげてライトダウンをできるようにしたい。その日は星に限定せず月や地球を感じる１日になってはどうかと思う。それらの実現を目指したい。

③長期目標（50年後にありたい姿）
日常的に月や星、自然を愛でる文化ができている
日常的に自分で月を見る。そういう文化を取り戻し、照明も最低限の照度になっていたり、働く時間なども含めて月や星を愛でる余裕がある社会になっていることを望む。50年経てば月から地球をみる「地球待会」もやれるかもしれない。

「自然と都市が交わる暮らし」実現のために私たちができること

自分のまちを愛する人を増やす

プロジェクト名：桜城橋ふき・殿橋洗い
実施団体名：あいち橋の会
実施ゾーン：人道橋ゾーン
プロジェクト開始年：2020年～（3年目）

■事業概要
桜城橋ふきは、桜城橋の木床版を、乙川で汲んだ水で濡らした雑巾で拭く活動。毎月第4土曜17時から実施。子どもと大人が競い合って雑巾がけをしたり、地域で暮らす人たちの交流の場にもなっている。桜城橋は岡崎産材で木装化されていることから、橋をふくことで額田森への思いをはせる活動にもなっている。橋ふき後には、林業従事者、県や市の職員を呼んで、桜城橋のことや額田ことを学ぶ橋上教室も行っている。
殿橋洗いは、自分のまちの土木構造物に関心を持ち愛してほしいという思いで、近代土木遺産「殿橋」を洗いをみんなで一緒に洗うイベント。これまで不定期に3回実施し、毎回20～30名の方が参加している。橋を自分たちの手で洗うことで橋への愛着が育まれる。

■プロジェクトの実施状況

【桜城橋ふき】

- 桜城橋の雑巾がけを行うプログラム。毎月第4土曜日に実施している。参加人数は毎回30人程度。暖かい時期には講師を招き「橋上教室」を開催している。

【殿橋洗い】

- 近代土木遺産である殿橋の魅力を伝えるために市民有志で殿橋の掃除を行うプログラム。路面の雑草を抜いたり、デッキブラシやたわしで殿橋をこすって汚れを落とす等を行う。2019年から2022年にかけて毎年1回、合計3回実施している。

■実施して見えてきた成果

- 朝日新聞の取材後ぐらいに、知らない人も来るようになってきた。
- 子どもが参加し「また来るね！」と言ってくれたり「この橋僕が拭いた橋」と言ってくれたりするのは嬉しかったし、小学生を対象に橋の上で授業がさせてもらえたのは感慨深かった。テレビ局もが表面的ではなく、きちんと取材してくれたのもありがたかった。

■実施していく上での課題

- リバーベースが使えなくなると駐車場がなくなるのと物品の管理が困る。桜城橋下にある柵の中に置けたらいいのではと考えている。
- 殿橋洗いは開催にあたって警察協議など負担が大きい。今後は専門家と行政のサポートを受けながら、殿橋のメンテナンス方法を検討していきたいし、2023年には地元のメンテナンス業者と一緒に一つの方向を向いて活動をしたいと思っている。

プロジェクトの今後の展望

①短期目標（5年後にありたい姿）

桜城橋ふきの継続・乙川エリアの魅力を伝えていく

イベントでなく自然な形で橋ふきが継続的に行われる状態をつくりたい。乙川エリアに架かる多くの橋（殿橋、明代橋、潜水橋、名鉄鉄橋、竹千代橋など）のツアーを観光船や地元ホテルなどと実施し、この地区の魅力発信や価値を高める活動をしたい。2027年に100周年を迎える殿橋についてイベントなどを実施し魅力を発信したい。

②中期目標（10年後にありたい姿）

桜城橋葺き替えに向けて、持続可能な維持管理の在り方の模索

20年後（2040年）頃に予定されている橋の葺き替えを実行できるよう活動を続け、市民の愛着や意識を高めていきたい。
桜城橋ふきに関わる人たちの中には様々な専門分野の人がいる。土木構造物（橋梁）の技術者、木床版工事に携わった技術者、額田の森の林業家、都市の木質化の専門家など。現在でも簡単なメンテナンスや補修などが可能。いずれは管理者がメンテナンスできない部分の役割を担いたい。

③長期目標（50年後にありたい姿）

乙川エリアを誰もが大切に思える場所に

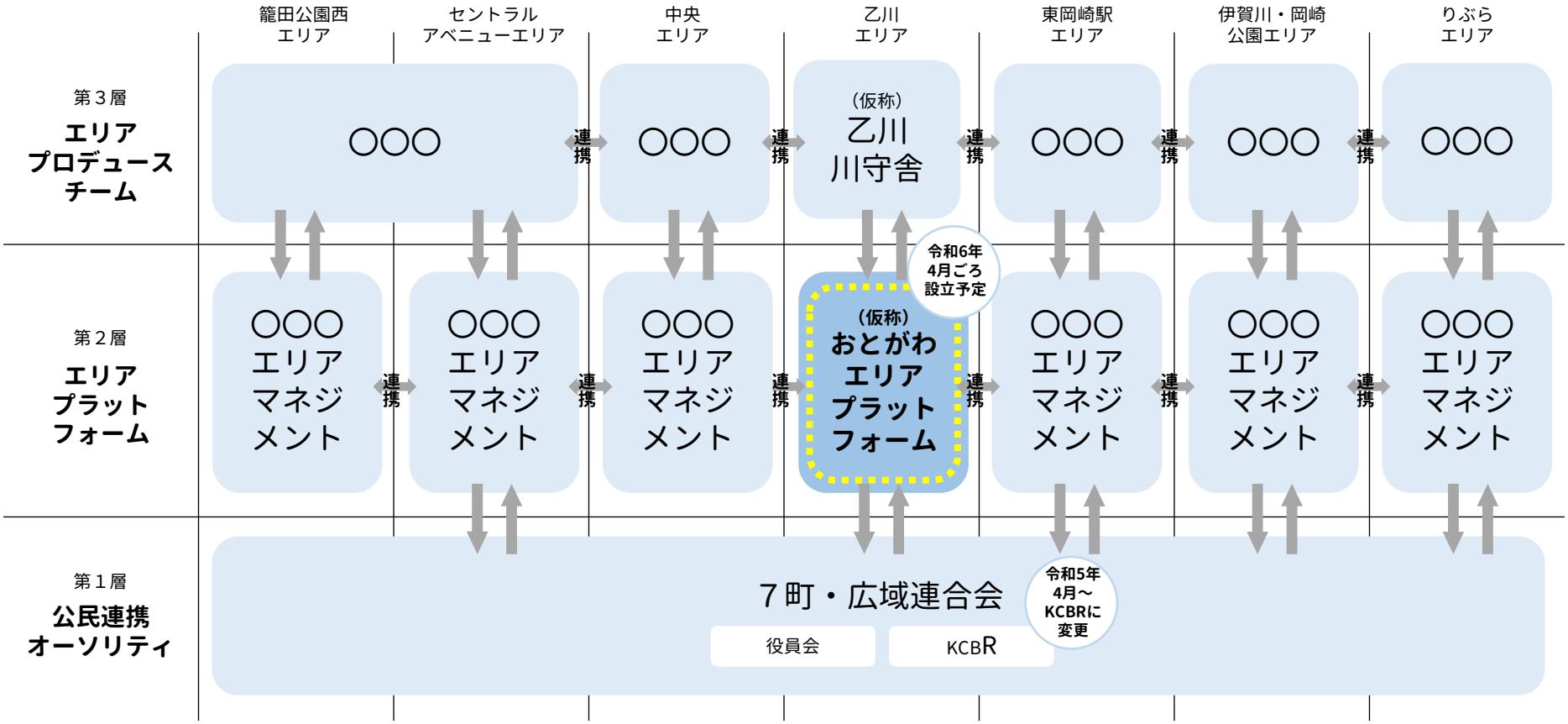
殿橋や桜城橋に限らず、乙川エリアが多くの方にとって大切な場所だと思えるような場所にしていきたい。それらの実現に向けて、これからも自身の活動を継続して実施していきたい。また、このエリアについてさらに多くの専門家（まちづくり、河川、治水、農林、水産など）を交え、より効果的な維持管理の方法だけでなく、この場所にふさわしい価値の向上策など、地元業者、行政の管理者、市民とともに、知恵を出しながら実践していきたい。

第５章

おとがわエリアビジョンの実現に向けて

（仮称）おとがわエリアプラットフォームの設立

おとがわエリアビジョンを実現することを目的に、乙川エリアを対象にしたエリアマネジメント組織「（仮称）おとがわエリアプラットフォーム」の設立に向け動きます。
エリアプラットフォームはエリア内の拠点事業者、地元企業、民間プレーヤー、町内会等のメンバーで構成され、エリアの課題解決や価値向上の役割を担います。７町・広域連合会（KCBR）への参加や他エリアのマネジメント主体（次世代の会等）とも協働関係を結び、連携しながら進めていきます。【図：QURUWAのエリアマネジメント体制案】

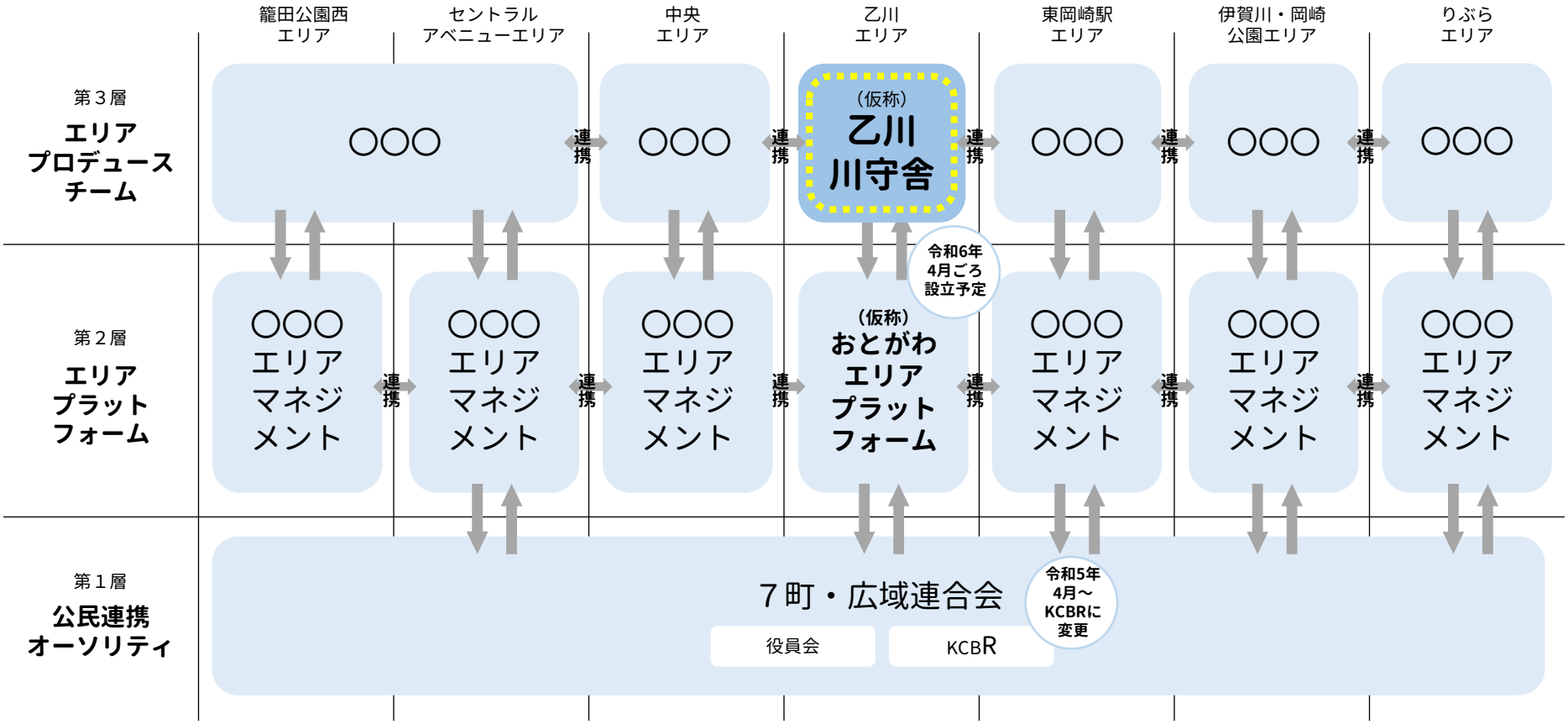


■ 各組織の体制・運営イメージ

組織種別	組織概要	構成員イメージ
【　第３層　】 エリア プロデュース チーム	• エリア（テーマ）の特性を踏まえ、戦略性・事業性の高いプロジェクト（実務）を企画・実施するチーム • 第1・2層との縦の連携及び第3層同志の横の連携が必須 • 第2層の事務局機能を担うこともある。	• ローカルデベロッパー • まちづくり会社 • 家守・川守会社
【　第２層　】 エリア プラットフォーム	• 志や価値観を共有し、自主性・多様性を尊重する有志の集合体。 • 第1層（公民連携オーソリティ）の信任を受け、エリアの課題解決や価値創造の取組みを検討・実施する。	• 拠点開発事業者 • 地元企業 • 指定管理者 • 民間プレイヤー • 行政 • 町内会（各エリア）
【　第１層　】 公民連携 オーソリティ	• 自治会役員、行政関係課、エリアプラットフォームの代表者等で構成する • エリアマネジメントの責任と権限を有する。 • 第2層（エリアプラットフォーム）を信頼し、権限を委譲する。	• エリアプラットフォームの代表者 • 行政 • 町内会

公共空間の世話役（エリアプロデュースチーム）の役割整理と位置づけ

エリアで行われるプロジェクトの具体化や民間事業者とともにエリアの魅力を高める事業実施
さらには各事業者やそれらが行う活動をつなげることでエリアの特性を最大化する
エリアの世話役チーム（エリアプロデュースチーム）が必要と考える。
前述したエリアプラットフォームとの連動が必須であり、エリアプラットフォームの実働組織ともいえる。
エリアプラットフォームの事務局を担い、自身の事業を進めながらビジョン実現を進める。



エリアビジョンの広報・プロモーションの推進

エリアビジョンは作って終わりではなく、認知を広げ事業者やプレイヤーだけでなく、
日々、乙川を利用する市民までもがビジョンの実現に向け、それぞれの置かれた立場で行動を
起こしていくようなものになることが望ましい。そのために次年度以降から、
エリアビジョンの広報・プロモーションを推進していくことが必要だと考える。
※発信は前述した「（仮称）おとがわエリアプラットフォーム」が推進主体になることを想定

発信方法	取組み概要	実施時期	実施イメージ
おとがわエリアビジョン お披露目会	• おとがわエリアビジョン（改訂版）のお披露目会。更新作業に関わった方々（町内会、民間プレイヤー、地元企業、行政等）をお呼びして、完成したビジョンの内容共有を図る。	2023年5月ごろ	
おとがわエリアビジョン（概要版パンフレット）の作成と配布	• おとがわエリアビジョンの概要を取りまとめたパンフレット。なるべく優しい言葉を用いたりイラストを多用することであらゆる年代の方に手に取っていただけるような冊子を配布する。	2023年～	
QURUWAの情報発信との連携	• 現状行われているQURUWAの情報発信（ウェブサイト・QURUWAボード等）との連携を強化し、乙川エリアの情報欄にエリアビジョンの内容を掲載する。 • 市政だより等、行政が運用するメディアと連携するのも良い。	2023年～	